The Mill on the Floss における Maggie Tulliver の負っている duty の意義について

嶋　田　貴美子

1

In natural science, I have understood, there is nothing petty to the mind that has a large vision of relations, and to which every single object suggests a vast sum of conditions. It is surely the same with the observation of human life.[1] (自然科学においては物事の諸関係について大きな視野を持つ人にとって何らささいなものはなく，各物体は諸々の条件の広漠とした総体を暗示するものであることを私は知っている。人生を観察する場合にもかならず同じことがいえるのである。）という言葉からも明らかであるように，George Eliot は *The Mill on the Floss* の Maggie Tulliver を代表とする他の主要な登場人物の人生を特に決定論的哲学の観点においてたどっている。

その哲学に彼女が初めて親しく接したのは，知的友人グループの一人であり，また彼女の最初の love-affair の対象者ともなった Charles Bray[2] の思想に知的合意を得た22歳の時であった。Bray は彼女と親交を結ぶその直前の1841年，[3] *The Philosophy of Necessity ; or, The Law of Consequences, as applicable to Mental, Moral, and Science*（『必然性の哲学－心理学，倫理学，社会科学に応用されうるものとしての因果律』）を著わしており，その中で人間の精神が物理的諸現象と同様に一定不変の法則によって支配されているという思想を明らかにしていたのである。[4]

George Eliot が独自の小説執筆態度を形成するにいたる19世紀前半のイギリス社会は，産業革命の結果による社会状勢のめまぐるしい変転に伴って，思想界においてもまた科学的学問分野においても賑やかな論議が提唱された時代であった。George Eliot が芸術や人生に関する概念を形成していく上でもっとも大きな助けとなった思想家は Feurbach,[5] Spinoza,[6] Goethe[7] の三人であったが，この Bray の決定論的哲学観は彼女の中でこの他にも，Comte,[8] Spencer,[9] Darwin,[10] Huxley,[11] Marx[12] 等により修正され，深化され，また拡大されていったのである。[13] そして彼女は人文研究のすべての領域において「物理界，倫理界を通じて終始一貫する法則の存在—物理学の基本であると認められながらなお我々の社会機構，倫理観，宗教観からは依然として根強く無視され続けている連錯の不変の存在」（Mackey[14] の *Progress of the Intellect, as Exemplified in the Religious Develoment of the Greeks and Hebrews*[15] について1851年に書いた書評）を受け入れるに至ったのである。

概して George Eliot の小説は主人公なる人もそのテーマもそれほどに明瞭ではない場合

が多い。それは上記の引用文からも察せられるとおり，彼女の小説では何ら petty であるものはなく，登場するそれぞれの人物はもとより，したがって彼ら登場人物が起す事件のすべて，それから，彼らが生きる背景であるその社会すなわち共同体のそのおのおのが，等しく大きな意義を持たされていて，それらが総体として彼女の小説の世界を形作っているからである。

The Mill on the Floss では Maggie のお父さんである Mr. Tulliver の特異な人生哲学，それからもたらされた彼の劇的人生，また兄 Tom の，弱冠16歳にして父の破産と家の再興のために孤軍奮闘し立派に任務を果たした，父親とは異なった意味での劇的人生等が，Maggie の人生と同等，あるいは，ある時は Maggie の人生そのものよりも大きな重みを持って story が運ばれていくのであるが，その中にあって Maggie が自分の人生に生起する事がらをそれにいかに対処させ，そしてさらなる彼女自身の人生のテーマにいかにとり組んでいくかが，この小説の中での論議をよぶところであって，その意味ではやはり Maggie が主人公と言えるであろう。

しかし，Maggie の人生にくり返し起こる passion と duty のテーマは，もちろん Maggie 自身の責任とか moral とかあるいは時の偶然等が認められなければならないが，上記の George Eliot 哲学観からすれば，その Mr. Tulliver の強い虚栄心と自尊心がもたらした弁護士 Wakem への絶対的憎悪の人生や Tom の冷厳な性格や正義感に満ちた律義な人生等々のすべてが，それを決定する要因にあずかるのである。

この *The Mill on the Floss* をフランス語に翻訳した D'Albert-Durade がその題として "Amour et Devoir"（「愛と義務」）はどうかと示唆した折に George Eliot[16] は憤慨して「"Amour et Devoir" などという題だけは絶対にやめてもらわねばなりません」と書き送ったのではあったが，それはただ表題としては不適当というだけで，やはりこの小説のテーマは，[17] Maggie の Philip Wakem への passion と主に父親や兄への duty とのジレンマ，それから Stephen Guest への passion を，大きな苦しみ，葛藤，ジレンマの後に Tom への duty に従属させるにいたったその意義にあるのである。

Maggie の人生から一切の喜びと幸せと，慰めと安らぎをはぎとった彼女の duty への意識は彼女の内にどのように形成されたものであるか，また弱冠19歳にして彼女を死に追いやったものは何か，すなわち Maggie を悲劇的運命に導いたのは何であったかを究明するためには，上に記したように George Eliot が *The Mill on the Floss* を，決定論的哲学観を彼女の小説群の中でも特に極立たせて執筆しているという事実から，彼女らが属する共同体である St. Ogg の町の歴史や Maggie の母方の家系である Dodson 家や父方の Tulliver 家の伝統的な思考パターンやしきたり，そしてまた Maggie の幼少の頃からの父・母・兄とのかかわり，それからおじ，おばたち，いとこの Lucy とのかかわりなど，それから Maggie も含めた彼らや St. Ogg の町の人たちが織りなす人間模様に内在する先行条件を見い出すことが肝要である。

2

Maggie の恋が二度とも大きな制約を持っていたということは，不幸であったといえばいえないことはない。しかし Maggie の，この Philip Wakem への恋，Stephen Guest への恋の両方とも，結果は Maggie を悲劇的ヒロインにしたててはいるものの，決して不可避的な運命的なものではなく，彼女の性格によって選ばれたものであるだけに，われわれは Maggie の人生に Thomas Hardy の "*Tess of the D'Urbervilles*" の中の Tess の運命にみられるような悲劇性とは異質のものを感じるのである。[18] Maggie の Philip にたいする恋と Stephen にたいする恋はその質を全く異にしているが，そのどちらにも共通しているのは，彼女の黒い瞳が彼ら二人を魅了し，また愛されたいという強い願望が Maggie の気持ちを彼ら二人に向かわせたという事実である。逆にいえば彼女の黒い瞳によって導かれた愛は彼女の性格ともなっている愛されたいという並はずれた，異常とも思われるほどの強い願望によって Maggie の悲劇的人生を決定したのである。その性格が形成された経緯は，兄 Tom よりも「二倍も acute である」[19]が "brown skin as makes her look like a mulatter"（「黒人とのあいのこみたいにみえる黒い肌」）やすなおにこてのかからない髪の毛のことで[20]常に劣勢に置かれざるをえなかった彼女の幼少の頃の家庭環境にあった。

Maggie の父方の Tulliver 家も母方の Dodson 家も共に decent and prosperous family ではあったが，Tulliver 家が現在は Mr. Tulliver のほかに彼の援助で何とか家計をきりもりしている貧しい妹の Mrs. Moss がいるのみで決して世間に誇れるものではなかったのに比して，Mrs. Tulliver の Dodson 家の Mrs. Glegg を長姉とする他の三姉妹がそれぞれ社会的に高い地位にあり，現在もなお繁栄の一途をたどっている伴侶を得て何かと Tulliver 家に強い圧力をかけているがために，to let the Dodsons know that they were not to domineer over *him*, or—more specifically—that a male Tulliver was far more than equel to four female Dodsons, even though one of them was Mrs Glegg（Dodson 家の者たちに，彼にいばりちらすわけにはいかないということを，すなわち，もっとわかりやすくいえば，Tulliver 家は男一人でも四人の Dodson 家の女性を束にしても，たとえその中の一人が Mrs. Glegg であろうとも，歯牙にもかけないぞということをわからせること）が彼らに対する原理となっている Mr. Tulliver と衝突することが多かった。[21]

Mr. Tulliver の口を借りれば a bit weak like である Mrs. Tulliver は，一糸乱れず頭の周りにきちんとカールし Maggie とは全く対照的に色白でおとなしくみるからに愛らしい妹の Deane 家の娘 Lucy の方を，自分の娘の理想像に描いていて，母親らしい心の底からの愛を Maggie に抱いている訳ではない。[22] それに反して Mr. Tulliver は Maggie の外見のことは一切気にせずしょっ中くり返される Maggie の mischief にも常に寛大であり彼女への非難に対しては味方である。しかし，"…over-'cute woman's no better nor long-tailed sheep—she'll fetch none the bigger price for that" とか' a woman's no business wi' being so clever ; it'll turn to trouble, I doubt…" と言っている Mr. Tulliver であるか[23]

ら，誇れるものは acuteness, cleverness しかない Maggie がいかにほめられたいと思ってもその願望が十分に満たされる訳がない。そして Maggie がもっともほめられたい愛されたいと思っているのは兄の Tom であった。いろいろな遊びを考案したりつりなどがとても上手で，虫のことや魚のことや鍵のあけ方など，本に書いてあることを覚えるよりもはるかにむずかしくすばらしいものであると Maggie が思っている知識が豊富なこの兄に対して，Maggie は畏敬の念をいだいていた。実際 Tom は Maggie の知識や作り話を“stuff”（「くだらないもの」）と言い，彼女の cleverness にも驚かないたった一人の人であったのである。また Tom は Maggie のことを a silly little thing（ばかなちび）とよび，女の子はみんなばかだ（silly）と決めつけていたために，Maggie のことを“a stupid”とあざわらうことはたびたびあっても，ほめるようなことは決してなかったのである。

Tom が Maggie にむかって言った，その“stuff”とか“silly”とか“stupid”とかいう言葉は，父親がただ一人 a strait black-eyed wench であることを評価する以外にほめられるべきところのなかった児童期の Maggie の，自己の存在を主張するための唯一のよすがである acuteness, cleverness, それから本を通じての知識の豊富さを，根底から否定するものであった。確かに Tom も妹がとても好きで「いつでも彼女の世話をしてやろうと思っていたし，将来は彼女を彼の家の housekeeper にしてやろう」と思ってはいたが，Maggie にとって自分を支配する存在としてのそのような Tom の愛[24]は全く必要ではなかった。その愛の中には「彼女が何か悪いことをしたら罰してやるぞ」という Maggie がもっとも恐れている Tom の意図がこめられていたからである。それよりも Maggie が特に Tom に望んだことは，Tom だけは自分を正当に評価してほしいということ，つまりつりなどの遊びに対する Tom の天才的能力に Maggie が畏敬の念を抱くように，Tom 自身が持っていない Maggie のその美点を Tom にしっかり評価してもらいたいということであった。それゆえ児童期の Maggie と Tom との関係は，人格を何とか認めてもらおうとする魂と，男であること三歳年長であること，実利的能力にたけていることで，それを威圧しようとする魂との格闘にあったといえる。

誰からも正当に評価されない悲しさで Maggie はますます空想癖にひたり，本や音楽や絵画などの知性の世界にのめりこんでいくのである。これはさらに Tom や父や母や，また Maggie の属する社会を主に構成する Dodson 家出身のおばたちから Maggie を孤立させる結果になった。このようにして愛されたいという欲求が十分満たされないままに Maggie は彼女の属するその小さな社会の異端分子としての性格が形成されていくのである。社会の異端的存在の Maggie であるから彼女の恋もまた異端的性格を帯びるのは大いにありうることである。しかし，Maggie のその求めても満たされない愛と，美を追い求めあくなき知性を満たそうとするその性格は a strait black-eyed wench の黒い瞳をますます魅力的なものにし Philip や Stephen ばかりか周りの人々を不思議に魅了する美しい乙女へと変身させたのであった。

3

そのように Maggie が，まずは父親が聖書に誓っても許すことができないほど憎悪し Tulliver 家の宿敵ともいえる弁護士 Wakem の息子 Philip に恋をし，さらにいとこ Lucy の婚約者とも目されていた Stephen Guest と激しい恋におちたというその彼女の反道徳的行為の源は，彼女の内面をもう少しほりさげてみれば，それは Maggie が13歳の時のことであったが，父親の Mr. Tulliver が水車場の運営には欠くことのできない Floss 川の支流の Ripple 川の水の水利権の訴訟に敗れ，それと共に他のもろもろの不運なできごとも重なって，三代も続いてきたその水車場ばかりか家財や土地などの一切の財産を失った時に，彼女が抱いた次のような思いが彼女の心の中でより強化されていったことにあったのである。

: everybody in the world seemed so hard and unkind to Maggie : there was no indulgence, no fondness, such as she imagined when she fashioned the world afresh in her own thoughts. In books there were people who were always agreeable or tender, and delighted to do things that made one happy, and who did not show their kindness by finding fault. The world outside the books was not a happy one, Maggie felt : it seemed to be a world where people behaved the best to those they did not pretend to love, and that did not belong to them. And if life had no love in it, what else was there for Maggie? Nothing but poverty and companionship of her mother's narrow grief—perhaps of her father's heart-cutting childish dependence.

…Maggie…, was a creature full of eager, passionate longings for all that was beautiful and glad.(25)

(世の中の人はみんなマギーに対して非常に厳しく不親切に思われた。彼女が自分の思いの中で世の中を新しく作る時に想像するような寛大さも慈愛も全くないのだ。本の中には感じがよく心やさしく人を幸せにすることを喜んでする人たちがいつもでてくる。そしてそういう人たちは人のあらをさがすことで親切心を示そうなどとはしない。本の外の世界は幸せなものではないとマギーは思った。それは，愛そうとも思っていない人々や彼らになじみのない人々を最高に丁重に扱う世界であるようだ。そして，もし生活に愛というものが全くないとしたら，マギーにとって他に何が残るであろう。貧困と母親の偏狭な悲しみとのつきあい—それと多分父親の心もつんざくような子供っぽい依頼心とのおつきあいのほかには何もないのだ。

マギーは，…美しいものとか喜ばしいもののすべてへの熱烈な憧れにみちみちた少女であった。)

すなわち Maggie は，幼い頃から求めても得られなかった自分の欲求のはけ口として身につけていた空想と書物の世界に生きていたのであり，そこには愛以外の何物も存在してはいなかった。父親の大けがと破産と共に Maggie の生活をそれまでよりもっともっと圧迫し始めた現実の醜い陰うつさにへきえきし，のがれられるはずもないのに，自分のその不幸な境涯か

らやさしく美しい愛に満ちた世界に逃げ出したいと常に思っていたのである。

弱冠16歳にして，父親の破産という大惨事に遭い，破産したショックによって引き起こした大けがのために生死をさまよう父親と愚かな母親と妹とを扶養しなければならない運命に追いこまれ，さらには家の再興をめざして愚痴もこぼさず黙々とその任務を果たそうとしている兄の Tom からみれば，Maggie のそのような願望は非現実的で，決して許されるべくもない egoism のほかの何物でもなかった。Tom は "…You think you know better than any one, but you're almost always wrong. I can judge much better than you can" "No, I'm not harsh. I'm always kind to you ; and so I shall be ; I shall always take care of you. But you must mind what I say." (「君は，自分が誰よりもよく心得ていると思っているがほとんどいつでも君は間違っているんだ。[(26)] 僕は君なんかよりずっと適切に判断することができるんだ」) (「いいや僕は残酷なんかじゃない。僕はいつでも君には親切だ。これからだってそうするつもりさ。僕は常に君の世話をしていくつもりだよ。でも君は僕の言うことに従わなくてはならないんだ。」) と言う。

このようにしてもはや児童期においてすでに現われていた現実の世界に着実に生きる Tom と，非現実の世界に逃避しがちな Maggie のその気持ちのずれは，兄弟としてお互いに愛し合う気持ちはありながら父親の起した大惨事を通してますます相いれないものになっていったのである。そしてその Tom の Maggie に対する感情の中に現われた偏狭で義務を強いる強い観念は Dodson 家，Tulliver 家，ひいては St. Ogg の町の人たちみんなの社会的通念でもあった。彼らは代々次のような倫理観宗教観を持っていたのである。

4

Here, one has conventional worldly notions and habits without instruction and without polish—surely the most prosaic form of human life ; proud respectability in a gig of unfashionable build : worldliness without side-dishes. Observing these people narrowly, even when the iron hand of misfortune has shaken them from their unquestioning hold on the world, one sees little trace of religion, still less of a distinctively Christian creed… ; their moral notions, though held with strong tenacity, seem to have no standard beyond hereditary custom. You could not live among such people ; you are stifled for want of an outlet towavds somethnig beautiful, great, or noble ; you are irritated with these dull men and women, as a kind of population out of keeping with the earth on which they live.[(27)]

(ここでは人は教化も受けず洗練もされない因襲的な世俗的観念や習慣を持っている—それは確かに人間の生活の中で最も殺風景な形である。時代遅れの作りの二輪馬車に乗っても誇らしげに堂々としている。添え料理もなしですませる世俗性がある。つぶさにこのような人たちを観察してみると，たとえ不運の鉄の手が，彼らが何の疑問もなく世の中にしがみついているものから彼らをふり落とした時ですら宗教の痕跡を見ることはなく，キリスト教徒

独特の信条などましてや問題外である。彼らの道徳観念は頑強に保持されているけれども先祖伝来の習慣を越える基準は全くないようである。そのような人々の中では住めるものではない。美しいもの偉大なもの崇高なものを求める気持ちのそのはけ口がないために息がつまってしまう。彼らが住む大地に折り合っていかれない一種の住民として，これらの退屈な男女に我々はいらだつのだ—)

これは Dodson 家 Tulliver 家の両家に共通する生活スタイル・心情の描写であるが，さらに Dodson 家には特別にまた次のような特質がある。

To be honest and poor was never a Dodson motto, still less to seem rich though being poor ; rather, the family badge was to be honest and rich ; and not only rich, but richer than was supposed. To live respected, and have the proper bearers at your funeral, was an achievement of the ends of existense···· A conspicuous quality in the Dodson character was its genuineness : its vices and virtues alike were phases of a proud, honest egoism, which had a hearty dislike to whatever made against its own credit and interest, and would be frankly hard of speech to inconvenient "kin" but would never forsake or ignore them—would not let them want bread, but only require them to eat it with bitter herbs.[28]

(正直であれは貧しくともいうことは決して Dodson 家のモットーにはなりえず，貧しいのに，金持ちにみせることなどもっての外であった。そうではなくて，その家系の印は正直かつ金持ちであることであった。それもただ金持ちであるというのでは十分ではなく，想像以上に金持ちであることであった。尊敬されて生活すること，葬式の棺は立派な人に運搬してもらうことはこの世に存在した目的が達成された証であった。····Dodson 家の性格の中で目立っている特性は真正であることであった。それが持つ悪徳も美徳も，自身の信用や利益のために不利になるようなものは何でも徹底的に嫌うという，誇り高く正直な利己主義の一面であって，迷惑な「縁者」にはあけすけに厳しいことばも言ったであろうが，でも決して彼らを見捨てたり無視したりはしなかった—彼らにパンにもことかくようなことはさせなかったのであるが，ただそれを苦い薬草といっしょに食べるよう強いたのであった。)

この Tulliver 家 Dodson 家両家の，本質においては野蛮でありながら世俗的欲望の上に立つ上品さや，進歩や発展の糸口すら見られないこの思考パターンの陰うつさや閉鎖性は，Roma 軍が引きあげたあと，long-haired sea kings がそのフロス川をさかのぼってきて「肥えたその地の土壌に[29]狂暴な熱っぽいまなざしをそそ[30]いだ」時からの，ほぼ一千年の歴史を持つSt. Ogg の町の "familiar with forgotten years"（「忘れられた遠い年月と深くなじんでいる」）その体質にそのまま影響を受けたものであるといえよう。すなわち Tulliver 家も Dodson 家も共に St. Ogg の町そのものであり，また St. Ogg の町の住民そのものであったのである。

一千年の昔からそこに存続し続けたとはいえ，St. Ogg の町はただ漫然と一千年の時を過してきたわけではない。前に記したような Dane の侵略，Saxon の英雄である Alfred 王の[31]

Dane からのイギリス救出，さらなる Dane の侵略，Norman の侵入，それから幾たびかの Floss川の洪水による住民の傷手，the civil war[32] の災害，すなわち Puritans[33] と Loyalists との度重なる戦いの地となり，すべての財産を失った人たちは無一文となってその[34] native town[35] を去らなければならなかった事件，等々を経験してきた。しかし長い歴史を持つ町の人々が往々にして，その長い時の重みにしばられて保守的にならざるをえないように，この数々の史実もSt. Ogg の町の人々の心を新生へと向かわせる作用は及ぼしていない。St. Oggの人々の気持ちの中にはただ目の前の現実に直結する，the Cathorics と bad harvest それに mysterious fluctuation of trade（物価の不思議な変動）のこの三つ[36]に対する恐れがあるだけで，長い過去の歴史については思い起こすこともなくただその過去を引きついでいるのである。すなわち，St. Ogg の町の住民を見る限り，戦争の恐ろしさも洪水や地震などの災害も人心を変革する力になりうることはまずなかったということがいえるのであろう。

本学紀要の14，15，16号の筆者の論文の中でみてきた，*Felix Holt* の Treby Magana の町とそこに隣接するする Little Treby 村が，近くで炭坑が掘られるようになるやいなや，イギリス国内に吹き荒れていた産業革命の波がどっと押しよせ，たった20年ほどでそこの住民たちの観念を，宗教的にも社会的通念の面においても，みごとにひっくり返したように，人間が旧態を脱却するのは彼らの経済的基盤に大きな変化が迫られた場合に限られるのである。その場合においても，Little Treby 村の地主階級という絶対的な旧勢力を代表する Mrs. Transome を見ればわかるように，そこの住民の意識変革は，急激な外界の変化に伴って住民の内部から自発的に行なわれることはまずないといってよいであろう。Treby Magna や Little Treby 村の新生を達成させたのは，産業の変革によって新たに流入してきた都市部からの労働者であり，それまで水面下で旧勢力に反目していた Dissenter たちであり，イギリス国教会牧師や Mrs. Transome 等の旧勢力はその新生勢力と新しい物の考え方に徹底的に対抗している。

この Transome 夫人の例にみられるように，人間は過去現在未来の一貫性を保持しようとし，現在の自分が快適であれば自分の属する世界をより快適なものにしようとする働きかけはするとしても他の世界を見ようともしない保守的で臆病な存在である。特に a continuation and outgrowth of nature, as much as the nests of the bower-birds or the winding galleries of the white ants.（こやつくりの巣や白ありの曲がりくねった通路[37]と同じように自然の継続でありまた自然のままにたんたんと過ぎていく[38]町）の印象を与える St. Ogg の町で代々名が知られてきた Dodson 家であるから，ちょっとやそっとのことで Mrs. Tulliver を三女とするその四姉妹が先祖代々のモットーや思考パターンに，ほんのわずかにしても新しい風を入れる余裕などあるはずはない。そしてこの *The Mill on the Floss* の読後感にあるやりきれない何とも陰うつな感じは，先の引用文の中にみられるような，Dodson 家 Tulliver 家両家に共通して伝来しているその思考パターンの中に厳然としてある陰うつさ偏狭さが，Mr. Tulliver のすさまじい激昂死や Maggie の常軌を逸した Stephen Guest との恋などをとおして，最も Dodson 的である Dodson の長姉の Glegg 夫人が Maggie のその逃避行について Maggie の立場を身内の人や St. Ogg の町の人たちから擁護する側に立ったという

わずかな光明はあったものの，小説の最後までおおむねそのまま持続されているからである。

とはいえ現実的な日常的な問題について，あまり聡明ではなく独自の意見を持ちえないMrs. Tulliver は事あるごとに自分の姉妹夫婦を招いて彼らの意見をきいたのであったが，Mr. Tulliver と Dodson 姉妹との間の考え方がぴったり一致することはほとんどなかった。Tulliver 家の traditional belief にはさらに，generous imprudence（気前のよい無分別さ）や warm affection（温かな情愛），hot-tempered rashness（激しやすい気短かさ）などが加わっていて，それは Mr. Tulliver の祖先にもまた破産者を生んだという，社会生活を営む上では非常に危険な性格ではあった。しかし，代々水ももらさない堅固な motto に従って家紋に汚点を残した者が一人もない Dodson 的性格と比較してみれば，彼らにはある意味では原罪を持つ人の子としての人間らしさがあったと解することもできるであろう。つまり Dodson 家と Tulliver 家の考え方は，底流は同じくしながら，実際的には水と油ほども異なっていたのである。そしてMr. Tulliver は Tulliver 家を代表する男子としての自尊心と誇りから，情に薄い正義一辺倒の Dodson 家の traditional belief を脅かしたのである。しかしそれが破綻し，Dodson への体面も消失するや，Mr. Tulliver のぼろぼろに傷つけられた自尊心と誤りは，自己の中にその破綻の原因を認めようとはせず，自己流の正義の中にあるその誤りを暴露した弁護士 Wakem という対象に向かい激しい憎悪となってほとばしり出るのである。つまり Mr. Tulliver の自らの内にある generous imprudence によってもたらされた破産という，立派な社会的地位を誇る一人の男にとって，生涯の恥辱となる重大事も Mr. Tulliver の精神的成長を促す教訓には全くなりえず，逆に hot-tempered rashness とあいまってその偏狭さを強めていったのである。

Adam Bede の中で，自分の正義に反する者はたとえそれが父親であろうと許そうとはしないほどのがんこ者であった Adam が思いもかけなかったその父親の溺死を通じてやっと弱い者への sympathy を感じるようになり，さらには，美しい農民の娘 Hetty との戯れの恋にふけり，自分が心の底から愛する Hetty に，恐ろしい結果をもたらすことになった由緒ある家柄の地主の息子 Arthur の性格的弱さをも，結局は許すようになったその明かるい展望は，Mr. Tulliver の中には全く見られない。それどころか，この Mr. Tulliver の死にも直結した破産という事件は，Dodson 姉妹に Dodson 家伝来の motto や思考パターンの正当性を改めて感じさせ，その堅固さに伴う人間味のない独特の偏狭さをさらに強めさせる一助ともなったのであった。George Eliot が dull men and women として Mr. Tulliver や Dodson 姉妹をながめているのは，何事にも動じず，どんな精神的 damage にも何ら人間的な成長のないこの St. Ogg の町の住民の愚かさにいらだちを感じているのである。Mr. Tulliver の誤ちが何の光明も得られないまま彼の死の最後までその不幸をさらにつらいものにしたと同じように，そのような St. Ogg の風潮の中では Maggie の誤ちはさらに大きな不幸を Maggie にもたらすことになったことは言うまでもない。そしてこのことも *The Mill on the Floss* の小説を陰うつにしている原因の一つなのである。

先に記した *Adam Bede* の中の Adam の融通のきかないその性格を変容させたのはやは

り彼が属している Hayslope 村という村落共同体の持つ人間味豊かなその性格であり，また *Silas marner* で金貨にしがみついていた Silas の人間性を取りもどさせたのも Raveloe 村という村落の持つ人間的な温かさであった。*The Mill on the Floss* の小説に光りを与える唯一の新生の萌芽は，*Floss* 川の氾濫による大洪水の中を，Stephen Guest との恋の一件で自分の家に入ることを戸主となっている兄の Tom に拒絶されやむなく寄宿していた Tom の幼なじみの Bob Jakin の家に備えられていたボートに乗った Maggie が，真っ先に水車場の家にいる母親と Tom のところにボートを向け，Tom をそのボートに救出することにより ほんのつかのま幼い頃の兄妹の愛を回復したことの中にあるのであるが，彼ら二人のその和解の完結が，ボートの転覆による溺死というそのようないたましい形でしか達成され得なかったことは何ともやりきれなく寂しい。*Adam Bede* や *Silas Marner* や *Felix Holt* などの小説の中で，一つの事件が克服される毎に見られる何らかの進歩の跡が，この *The Mill on the Floss* では全く見られず，最後の Maggie と Tom の和解とても，それが二人共にこうむった不可抗力の水死という形での完結では，それが未来永劫続くはずの真実の和解であったかは疑わしい。

George Eliot は彼女の多くの小説の舞台を「進歩への確信を強調するのに都合よく，同時に彼女に過去の伝統の最高のものを慈しむことを許す比較的近い過去」を選んでいて，その特色は，本学紀要14, 15, 16号の筆者の論文を見ればわかるように，*Adam Bede* や *Silas Marner* や *Felix Folt* の小説には十分発揮されている。[(39)] *The Mill on the Floss* の小説の舞台も，Tom を学問をするために Mr. Stelling の許に送ることの相談のために，Tulliver 家に Dodson 姉妹が来た折，Mr. Tulliver と Dodson の長姉 Mrs. Glegg との口論により他の全員がその応接間から引揚げた後，残された Dodson の末妹の夫である Mr. Deane と Mr. Tulliver との会話に出てくる Duke of Wellington の名前や Catholic Questionなどの話題から推定すれば，1830年前後の，小説執筆時の1860年よりも30年前に時代背景が設定されており，[(41)] 小説の舞台の設定のしかたについてはそれまでの彼女の小説の例外ではなかったが，人々の意識はもとよりその時代の St. Ogg というその共同体に限っても，*Adam Bede*の Hayslope 村や*Silas Marner* の Raveloe 村，*Felix Holt* の Little Treby 村や Treby Magna にみられるような George Eliot の「進歩への確信」はほとんど感じられない。[(40)]

先にも記したように George Eliot は St. Ogg の町の時間的経過を the nests of the bower-birds とか the winding galleries of white ants にたとえているが，弱冠16歳の Tom が破産した父親に代わり母と妹と父親本人を共に養いながら無一文になった家を立派に再興したその偉業も Tulliver 家 Dodson 家の traditional belief の偏狭さと，Dodson 家の motto にある非人間的な堅実さを強く持った Tom の手を通じると，まさにすっかり自分の巣をこわされた蟻がせっせと元のようにその巣を作り直しただけのものにしか見えない。Mr. Tulliver の死も Maggie の誤ちも，長い歴史に培われ古い因襲の下にある St. Ogg の住民の誰にも，彼らの一番身近にいる Tom にさえも，何も，新生にむかう心理的な影響を与えることはなかったのである。そして *The Mill on Floss* の読者の目の前にはただ Maggie の恋につ

きまとう duty と passion の問題だけがクローズアップされるのである。

5

まず Maggie と Philip Wakem との恋は，13歳になって academy を去り帰省した Tom が，to be a bit of a scholar（ちょっとばかりの教養を身につけた男になり）そして law-suits や arbitrations（仲裁裁判）やそれに類するごたごたで自分の手助けができるような人間になるようにという父 Mr. Tulliver の期待を背負って，Oxford 大学出身で clergy である Mr. Stelling のもとに送られて四・五ケ月後，Maggie が二度目に Tom を訪問し，新しいTom の学友として Tom と共に勉学にいそしむ，Tom より一歳余り年上の Philip を見た，彼女の11歳の時の出会いに，すでにその発端をもっていた。Tom はその数週間前に Maggie への手紙の中で Philip は果てしなくいろいろな話を知っていて，それもその話は Maggie の話のように stupid stories ではないことを知らせていたので Maggie は Philip に会った最初から彼に興味を持ち親近感を抱いたのだった。つまり Maggie の Philip に対する思いは，Tom が彼との出会いのその最初から Philip に抱いていた，Philip, being the son of a "rascal", was his natural enemy という感情からは全く解放されていたのである。そしてこの Maggie と Tom の Philip[(42)] への対し方に，Philip の父親の Mr. Wakem を嫌悪する父への duty に忠実な Tom と，全くそれを意に介さない Maggie の正反対の性格をみることができるであろう。事実 Tom はクリスマスの休暇で帰省していた折に休暇が明けるや Philip が Mr. Stelling のところで自分の学友になるであろうことを知った時父に "…You won't like me to go to school with Wakem's son, shall you？" とたずねている。Tom は水利権をめぐる訴訟問題で相手方についている有能な弁護士[(42)]である Wakem 攻略にますます頭を悩ませているらしい父親のその当の Wakem に対する憎悪の度合いをさぐり息子として Philip への対し方を考えていたのである。さらに Tom は Philip が humpbask（せむし）であることにもどうしても嫌悪感を禁じ得なかった。

ところが Maggie は肌の黒さとか落ち着かない髪とかでいとこの Lucy と比べられた外見の劣性に親戚中から非難された経験も手伝って deformed things には tenderness を持ち，「小羊でも首の曲がっているものの方が好きであった。とても丈夫で全く満足な体の小羊は愛されることをそれほど気にもとめていないように彼女には思われたからである。彼女は彼女に愛されることがとてもうれしく思うような愛する対象が特に好きであった」のである。一方 Philip は15歳という多感な年代を迎えていて，自分の不具を意識する[(43)]ことから心の苦痛をもっており，他人の目のなかにある disgust はもとより pity さえも冷淡な目つきにしかとれない場合が多かったのである。Tom が彼らの出会いのその最初から Philip の不具に対して pitty と disgust の二つの情から瞬時として解き放たれた感情を持つことができなかったことはそれだけでも彼ら二人の友情が育つ土壌を台なしにするものであったが，それはまた先の引用分にあるような，Philip が父 Mr. Tulliver が rascal とののしる人の息子であるから当然の敵だと思うその気持ちと共に，実さいに彼ら二人の間に険悪なムードをしばしば引きお

こす原因にもなった。しかし Maggie は，自分の父にののしられるような悪い人を親に持っているからこそ，父親の悪業を引きついでいないようにみえる Philip はよけいに同情しなくてはいけないと思う。そして外見よりも内面にある真の姿を見ようとする彼女の性格は，彼の学習の様子から察せられる彼の cleverness に注意が引きつけられるや，彼が不具であるということはすぐに意識の表から消滅させてしまったのである。

敏感な Philip は Maggie のその心持ちを直観的に感じとり次のように思う。

…this sister of Tulliver's seemed a nice little thing, quite unlike her brother ; he wished *he* had a little sister. What was it, he wondered, that made Maggie's dark eyes remind him of the stories about princesses being turned into animals？…(44)

(…Tulliver のこの妹は，兄さんとは全く違ってとてもいい子らしい。彼は妹がいたらどんなにいいだろうと思った。Maggie の黒い目は動物に変えられたお姫様のお話を思い出させるが，それはいったい何であろうかと彼は不思議に思った。)(45)

その Philip の疑問に対して作者自身すぐそのあとに続いて I think it was that her eyes were full of unsatisfied intelligence, and unsatisfied, beseeching affection.（それは彼女の目が満たされない知性と満たされない，心の底から希求する愛に満ちたものであったということだと私は思う。）と言っている。敏感な Phlilp のことであるから言明はできなくても作者と同じようなことを Maggie のその dark eyes に感じとったに違いない。そして Phlilp はMaggie に，何かを訴えようとしているような彼女のその dark eyes が好きであることを告げる。それまで彼女の dark eyes の値うちを評価してくれた人は父親と Phlilp の二人だけであった。

しかし，やがて長年の懸案であった Ripple 川の水利権の問題について相手方の代理人である弁護士の Mr. Wakem が Mr. Tulliver を相手どっていよいよ訴訟を起すことになり，Wakem ときくだけで腹をたて，その息子の Philip の将来をものろう父 Tulliver の姿を見ると，やはり Maggie でさえも自分も Tom もふたたび前のように Philip に親しくすることはないだろうと悲しく思ったが，その予測はそれよりはるかに恐ろしい形となって Maggie の上におそいかかった。Mr. Tulliver は，自己流の正義にのっとった考え方からしてその訴訟については絶対的な勝利を確信し，莫大な経費をかけていたのであるが，敗訴という思いもかけない結果により事実上破産してしまったのである。それでも何とか水車場主としての生き残りをかけた唯一の手だてにすがって奔走する Mr. Tulliver は，債権者側のさらなる不幸が重なって，事もあろうに自分の土地が知らないうちにその憎き弁護士 Wakem の手にすでに渡っていることを知る。そのとたん Mr. Tulliver は気を失って落馬しひどい意識障害に陥る。敗訴により破産が決定的になるや無意識のうちに Mr. Tulliver が出した手紙によって寄宿していた学校から家に帰った Maggie が，その火急の知らせを Mr. Stelling の学校にいる Tom に伝えに行き共に家路を急いでいる間に，Tom は "I believe that scoundrel's been planning all to ruin my father" "I'll make him feel for it when I'm a man. Mind you never speak to Philip again"(46)（「あの悪党はずっと父さんを破産させようとたくらんでいた

に違いないんだ。」「僕は大人になったらあいつに思い知らせてやるぞ。いいかい，おまえはもう二度と Philip になんか口をきいてはいけないよ。」）と Maggie に言い渡したのだ。

その当時は Maggie が Philip に出会ってからもはや三年が過ぎ，その間 Maggie と Philip は親しく話す機会すらなく，先にも述べたように訴訟問題によるお互いの父親の不和が Philip と Tom や自分との間の友好に何らかの障害になるだろうという思いが徐々にわいてきていた時ではあったが，弱冠16歳でありながら事実上 Maggie がその一切を頼らなければならない Tulliver 家の戸主となった Tom のその言葉は，託宣にも匹敵するほどの力を伴って，Maggie の頭上に下されたのである。

人間はぎりぎりに追いつめられた時，本性がよりあらわになるものである。Mr. Tulliver の破産は，当面の敗訴だけによって引き起されたものではなく，Tulliver の性格からくるそれまでの人生における不手際の一切が敗訴という事態と共に噴き出した結果であり，家屋敷ばかりか家財道具の一切にいたるまでなにもかものすべてをなくす最悪のものとなった。この思いも及ばなかった運命上の大惨劇の中にあって，これまで見てきたように性格的に正反対の Tom と Maggie の個性もむき出しにされ激しくぶつかり合うことになるのである。そして，上記の Mr. Stelling の許から家に向かう coach の中で Tom が言ったこの言葉は，まさにその序曲をなすものであった。しかし彼らの心理的対立が深まるにつれ，Maggie の身辺を管理しようとするばかりか Maggie の感情までもますますコントロールしようとする Tom に対するすなおな duty の意識は，Maggie の心になおさら育ちにくくなっていったのである。

6

父親の敗訴に伴う一家の破産という深刻な事態が Tom にもたらしたものは，我身の屈辱からの脱出さらにその上での経済的繁栄という目標に加えて，時々発作を起こし Maggie のこと以外何もわからないままベッドにこんこんと眠り続ける父 Tulliver の険悪な身体状態よりも，Teraphim とも信じている Dodson の name 入りの household goods が，裕福な姉妹たちの誰からの[(47)]好意ある経済的な援助もなく競売にかけられ人手に渡ることに身も世もなく悲しむ母親と，三歳年下の妹の Maggie を，父親に代わり何とか養っていかなければならないという強い義務感であった。父親がちょっと正気にもどった時に言った水車場の召使いである Luke に借りた50ポンドを Maggie と自分の貯金からまず支払おうとしたり，この機に臨んで Tom は，この義務感と正義感がひじょうに強い少年であることが露呈される。Tulliver 一家に対して債権者の取り立てが始まる前に，父親が貧しい農夫である妹の夫 Moss に貸してあった300pounds の note を破棄することを親戚中の前で提案した行為も，かつて父 Tulliver が Tom にだけ語りきかせた実の妹への恩情ある言葉に対する義務感と，そのお金の貸借契約が行われた時期と破産の時期との兼ね合いからそれは破棄するのが正当と判断した彼の正義感から成されたものであった。その行為は，その note をそのままにしておけば Tulliver 家の破産から必然的に派生する，Moss 家もう一軒の破産という惨事を阻止するものであり，Maggie と Aunt Moss を大そう喜ばせ，彼女らの Tom に対する崇敬の念を心ゆくばかり

よび起させるものではあったが，また反面 Tom 自身の感情の裏付けがない彼のこの義務感と正義感は，最もきわ立った Dodson 的性格である proud, honest egoism に基盤が置かれたものであり，Maggie に対しては特にきびしく彼の被保護者であるという意識[48]を彼女に強い，理屈やその場その場での冷静な判断よりも感情に流れやすい Maggie への不信感を彼に強めさせ，さらにそれがめぐってこの妹の実生活ばかりか心情にいたるまで束縛しようとする理不尽な行為を彼に平気で行わせる結果となったのである。すなわち Tom の心の中では自分が一家の戸主となって Maggie を守り世話をする義務に忠実である以上 Maggie もまた自分に従う義務があるのだとする合理性が働いていたのである。このようにいかに厳しい現実であろうともそれから逃げずひるまずそれを直視し，そこから導き出された義務（一面的には責任）に忠実ならんとしその庇護の下にある者に見合う義務を強要する Tom の正義と合理性は，Maggie のそのような厳しい現実にあってなおさら a creature full of eager, passionate longings for all that was beautiful and glad ; thirsty for all knowledge ; with an ear straining afterdreamy music that died away and would not come near to her（あらゆる美しいもの喜ばしいものに対する熱烈な憧れにみちみちていて，あらゆる知識への渇望[49]を持ち，すっかり消え失せてしまい身近に再びきこえてきそうもない夢幻的な音楽を追い求め耳をそばだてる存在）であろうとする非現実性とはまさに水と油であった。その，Tom が Maggie に強要するものが現実的 egoism であるとするならそれをはね返そうとする Maggie の中の力は知的 egoism であるといえよう。一家の破産という現実が Maggie にもたらしたものは，幼少の頃から彼女の中にあったこの知的 egoism をより強化したことである。Maggie が Philip の愛にのめりこんでいったのもこのためであったといえよう。

Maggie のこの知的 egoism は，一家を襲った災難から二ケ月後，病状がほぼ回復した父親が，今やかつて自分の所有物であった Dorlcote Mill を手に入れている憎き Wakem の下で働くという屈辱的な立場ながらその Mill の manager となって古巣を離れることなく元通りの仕事につくようになり，Tom の仕事も苛酷なものではあったが Uncle Deane の介添えですっかり軌道にのり，外見的には再び取りもどしたようにみえる，ひどい災難のあとの単々とした日常の中に潜むものうさと絶望にうちひしがれた，次のような彼女の心情から成り立っていた。

> She could make dream-worlds of her own—but no dream-world would satisfy her now. She wanted some explanation of this hard, real life : the unhappy-lookig father, seated at the dull-breakfast table ; the childish, bewildered mother ; the little sordid tasks that filled the hours, or more oppressive emptiness of weary, joyless leisure ; the need of some tender, demonstrative love ; the cruel sense that Tom didn't mind what she thought or felt, and that they were no longer playfellows together ; the privation of all pleasant things that had come to *her* more than to others : she wanted some key that would enable her to understand, and, in understanding, endure, the heavy weight that had fallen on her young heart.[50]

The discouragement deepend as the days went on, and the eager heart gained faster and faster on the patient mind. Somehow, when she sat at the window with her book, her eyes *would* fix themselves blankly on the out-door sunshine : then they would fill with tears, and sometimes, …the studies would all end in sobbing. She rebeled against her lot, she fainted under its loneliness and fits even of anger and hatred towards her father and mother, who were so unlike what she would have them to be—towards Tom, who checked her, and met her thought or feeling always by some thwarting difference—would flow out over her affections and conscience like a lava stream, and frighten her with a sense that it was not difficult for her to become a demon. Then her brain would be busy with wild romances of a flight from home in search of something less sordid and dreary : she would go to some great man—Walter Scott perhaps—and tell him how wretched and how clever she was, and he would surely do something for her.(51)

(彼女は彼女だけの夢の世界を作ることができた—しかし，今となってはどんな夢の世界も彼女を満足させることはできなかったのだ。彼女はこの苛酷な現実の生活についての説明が何かほしかった。わびしい朝食のテーブルについた不愉快そうな顔つきの父親，子供のようなおろおろした母親，何時間もの時間を満たしている細々としたきたない仕事，あるいは退屈な楽しみのない余暇の持つなおさら重苦しい空虚さ，やさしくはっきりと表現された確かな愛への欲求，彼女が考えたり感じたりすることを Tom は気にもとめず，もはや共に遊ぶ仲間にはなれないのだという残酷な意識，他の誰よりも自分に訪れていた楽しいことすべての喪失について説明が，彼女は彼女にしっかりわからせてくれ，そしてその中で彼女の若い心の中に落ちたその重荷に堪えさせてくれる錠のようなものがほしかった。

日がたつにつれて失意は深まっていき，はやる心はどんどん速度を速め，忍従する理性を追い越した。ともかく本を持って窓辺にすわっても彼女の目はいつもぼんやりと外の日ざしに注がれてしまうのであった。そして涙があふれ，勉強もすすり泣きで終わってしまうことも多かった。彼女は彼女の運命に反抗し，それがもたらす寂しさに気が遠くなった。彼女がそうあってほしいと思っている姿とはほど遠い父母に対して—彼女を制御し決して同調しない反対意見を述べてはいつも彼女が考えることや感じることにあらがう Tom に対して—怒りと憎悪すら感じその感情の爆発は焼けただれた溶岩の流れのように彼女の愛情と良心の上に流れ出し，自分が悪魔にもなりかねないという意識に彼女を恐れさせたのである。そんな時彼女の頭の中ではそれほどむさくるしくなくわびしくない何かを求めて家から逃げ出そうという無謀なとんでもない想像がかけめぐるのであった。彼女は誰かの偉大な人—例えば Walter Scott のような人—のところに行って自分がいかにみじめであるかそしてまたいかに利発な少女であるかをきいてもらいたかった。彼ならきっと彼女のために何かしてくれる

はずであった。)

結局 Maggie が一家の破産から得たものは日々の生活の中に横溢した虚無感であり，愛情と知性に対する，極限にまで達した飢餓感であった。しかしそれらは Tom の世界を構成するものとは全く無縁のものであり，それらを克服しようとする Maggie の葛藤は何ら Tom の理解は得られず，逆に Tom の現実的 egoism をより刺激するだけであった。いくら早熟であるとはいえ Maggie はまだ13〜14歳の少女である。一家の主である Tom に従属する以外に生きる道がないとすれば，家族の中で Maggie の心の中だけに広がっているその虚無感や飢餓感を心の中から一掃すること，すなわち彼女特有のその知的 egoism を捨て去らねばならない。Maggie は，bailiff（執行吏）によって聖書以外の本の一切を持ち去られてしまった惨状に同情した Bob の差し入れてくれた本の中の一冊から偶然啓示を受けた self-renunciation（自己放棄）でそれを行おうとする。そうすることは，Tom が a very strong appetite for pleasure を持ちながら一家の不幸のために現在は Industrious Apprentice（精励年期奉公人）として abstinence（禁欲）と self-denial（自己否定）が義務づけられたと同様に，一家の破産という現実が Maggie に課した duty だったのである。しかし，Tom の課されたその abstinence と self-denial は，何ら彼の人格をそこなうことはなく，むしろ彼の美点をより強く打ち出す手段となり，彼のその pleasure への強い欲望を構成する tamer of horses（上手な馬の使い手）になること，distinguished figure in all neighbouring eyes（近隣の人たちの目に著名な人）になること，そしてさらに one of the finest young fellows of those parts（その地域きっての立派な若者の一人）になることなどなどの目標を達成するための，まさにスタートラインであったのに対して，Maggie が自分に課したその self-renunciation は，Maggie の本性・自己を否定すること，すなわち Maggie の内なる生を抹殺することを意味した。Maggie は，

> "I've been a great deal happier", "since I have given up thinking about what is easy and pleasant, and being discontented because I couldn't have my own will. Our life is determined for us—and it makes the mind very free when we give up wishing, and only think of bearing what is laid upon us, and doing what is given us to do."(52)
>
> 「私は気楽なことや楽しいことを考えたり思い通りにならないからといって不満に思うことをやめてから」「とても幸せになりました。」「私たちの人生は限定されているのですね—ですから願望を持つことをやめ，ただただ私たちに課されたことに堪え，実行するようにしむけられたことを実行するようにすれば心は解き放たれるのですわ。」

と言ってはいるが，そこから得られる happiness や心の freedom は，ただ自分の内面と外界との軋轢からくる苦しさからの逃避によってもたらされたものでしかなく，Maggie の求める本当の幸せや心の解放であるはずがない。そのため Maggie のその self-renunciation という人生態度は，Tom や両親，特に母親の，Maggie にたいする視方を好ましいものに一転させる契機にはなったが，それから4年後，Maggie が散歩に出た時あとをつけてきた Philip Wakem との Red Deeps での再会と彼の愛の告白，そしてそれに伴う次のような Philip の

言葉によって大きく崩れていく。

"It seems to me we can never give up longing and wishing while we are thoroughly alive. There are certain things we feel to be beautiful and good, and we *must* hunger after them. How can we ever be satisfied without them until our feelings are deadened? I delight in fine pictures—I long to be able to paint such. I strive and strive, and can't produce what I want. That is pain to me, and always *will* be pain, untill my faculties lose their keenness, like aged eyes. Then there are many other things I long for"—…—"things that other men have, and that will always be denied me. My life will have nothing great or beautiful in it ; I would rather not have lived."(53)

「僕たちはちゃんと生きている間は決して憧れや願望を捨てることはできないと思います。僕たちが美しいと感じ善だと感じるものが確かにあるのですし，僕たちはそれをあくまで追い求めなければなりません。僕たちの感覚が鈍くなってしまわないうちは，いったいどうしてそれらなしで満足していくことができるでしょう。僕はすばらしい絵画に喜びを感じます—そんなふうに描けるようになればいいなと思います。僕は努力に努力を重ねますがそれでも自分が求めるものを生み出すことはできません。それは僕にはとってもつらいことです。そして僕の能力が年寄の目のようにその鋭さを欠くまでいつも苦痛であり続けることでしょう。それから他にもたくさん僕が憧れるものがあります」—…—「他の人が持っていても僕には常に与えられないであろうことが。僕の人生には偉大なものや美しいものは何もないでしょう。僕なんかいっそ生きていない方がいいんだ。」

すなわち Philip は Maggie の self-renunciation が彼女にとっていかに間違ったものであるかを説いたばかりか，self-renunciation をかくれみのにする以前の，彼女の生活の中に横溢していた虚無や，愛情と知性に対する飢餓を，逃避などという卑怯な形ではない正当な方法で消滅させる存在として Maggie の前に現われたのである。いやそればかりではない。上に記したように Philip は，その身の不具ゆえに「人間が共通して持っているはずの福利にも十分なわけまえを持たず，取るに足らないことをするにも標準に達することはできないで，特に彼だけが憐れみの対象となり，また他の人々には当然のことからもはずされなければならない」という絶対的な不幸を背負っているのであって，それに比べれば Maggie の身にふりかかった不幸やそこからもたらされた心の葛藤などはまさに取るに足らぬものであることを(54) Maggie に気付かせたのであった。実際成人した Philip に対する St. Ogg の町の人々の評判は彼が子供の頃受けたものより更に手きびしいものになり，that mismade son of Lawyer Wakem（ウェイケム弁護士のあのできそこないの息子）と卑下され，変人であり，人づき合いが嫌いな孤独な性格で，気でも狂いそうな若者だと言われ，Tom もまた，相変わらず Phlilp の不具を嫌悪する余り，「世間並の人間の仲間にも入れない不幸な男に妹が友情以上の感情を持つ可能性はほとんどないのではないかと思っていた」のである。

すなわち St. Ogg の人々は Philip を deformity という外的条件だけで評価し，彼の内面的美点，たとえば絵画や音楽に対する才能，あるいは生来の聡明さ，豊富な知識等については(55)

歯牙にもかけようとはしない。愛されたいという Maggie の性格を形成した，子供の頃から彼女の中にしみついている不満の原因も，彼女の外的条件である色黒という事実やそれから Lucy の髪のようにきちんとセットできない固い髪の毛にたいする非難を常に受け，彼女が子供ながらに誇りとしていた cleverness については父親以外の誰も評価してくれなかったことにあったのである。港湾都市という実利的な St. Ogg の町の人々にとっては，cleverness などはかえって人生途上の邪魔物であるだけで，彼らはそれよりも the common run of men (世間並の人間) であることの方が人生を生きる上ではより高く評価されねばならない条件であると考えていた。Maggie と Philip はもともと St. Ogg の町の人々の中では異端者であり，彼らとは融和できない別の世界で満足を得る egoist なのであった。Maggie はそれでも今は，色黒の肌は以前と変わらないにしても，魅力的な黒い目を持った美しい娘に成長し，self-renunciation なる方法で自我を捨てることによって異端的要因を抹殺することもできた。しかし Philip は成長すればするほど醜くなる deformity という絶対的な束縛を持っているのである。そのように deformity ということだけで彼とは進んで交友を持とうとしない人々の多い中で生涯生きていかなければならない Philip の心情が，同じ世界に住む者としてよく理解できた Maggie は，父 Tulliver が Philip の父に抱く理にかなわない復讐心のために，Philip との友好からしりごみするようなことは，彼にたいする残酷なしうちであり，彼をさらに不幸に陥れる間違った行為でもあると思った。そして Maggie はとうとう Philip の愛を受け入れ，if there were sacrifice in this love, it was all the richer and more satisfying (56) (もしこの愛に犠牲があるとすれば，それはなおさら豊かなものであるし満足のいくものである) と思い，彼の愛に real happiness を感じるのである。

しかし，家族の中における父 Tulliver の権限が全くなくなり，母方の Dodson の実利的生活感情の中で生きることが強制されている現在，そのような Maggie の，Philip への愛によってもたらされたものは全くの egoistic happiness であるといわざるをえない。ましてや Maggie には，父 Tulliver の Wakem に対する憎悪の問題があった。そしてそれはまた Tom にも父への義務感という形で受けつがれていたのである。

Tulliver は大きな不幸のショックによる落馬の後遺症である意識障害が治った時，家族全員が見守る中で Tom を相手に Wakem への復讐を誓う恐ろしい儀式めいた行為をしていたのである。Tulliver はまず Tom に自分は絶対に Wakem を許さないということ，そして「我が息子に生まれたからにはおまえも彼を決して許してはならない」ことを言いわたし，それから「災が Wakem の身にふりかかるように」とか「Wakem が(57)僕の父さんにしたことを僕は忘れない。だからいつかその時が来たら，彼と彼の子孫に思い知らせてやるのだ」等々のことを家族の Bible に Thomas Tulliver という署名入りで書かせ，誓わせていたのであった。すなわち今や破産し，Wakem の雇い人に堕した Mr. Tulliver の生存意義は，それまでのいくたびかの訴訟において Mr. Tulliver の相手側の弁護を引き受けては Mr. Tulliver を敗訴に追いこんできた Lawyer Wakem に対する怨念と復讐にあったのである。さらに Tulliver は，その最後の大きな訴訟の敗訴が全面的に Wakem によってもたされたものであると信

じ，その中にある自分の側の責任については全く考慮しようとはしていない。

そのような父を Maggie がいかに Christian としての道に反しているとか不条理であるとか非難してもむだである。Maggie もまた Tulliver の娘であるからには，Tulliver の息子として Tom が恐ろしいのろいの言葉を Bible に書きとめ，彼への絶対的な復讐を誓わされたように，Tulliver の怨みとその復讐心の成就に力を貸すことが義務であったのである。二人の愛が発覚した時 Tom が憤りに声をふるわせて "while I have been contriving and working that my father may have some peace of mind before he dies—working for respectability of our family—you have done all you can to destroy both."（「死ぬ前ににお父さんが少しでも心の平安が持てるように僕があれこれ工面して働いてきたのに[58]—家族の名誉のために働いてきたのに—君はその両方をぶちこわすために精いっぱいのことをしてきたんだね。」）と言ったのも無理はない。Tom は未成年の少年には恐るべき偉業である父親の debt をもうじき全額払い終えるところまできていた。彼の16歳の時に始まるその後4～5年の間の過酷な苦しみと屈辱は，Tom の心に，時にはそのような境涯に自分を引きこんだ父親に対する憤りを想起させはしたが，Wakem に対する特にさらなる Tom 自身の個人的な怨みをもたらしはしなかった。しかし，子供の頃から肌で感じていた父親の Wakem への憎悪からくる Wakem が悪人であるという先入観，Philip の deformity を嫌悪する気持ち，それから最近の敗訴・破産という大きな不幸のために Wakem への憎悪の感情の権化と化した現在の父親への義務と忠誠の光の中で，Tom は Philip Wakem の存在を考えていたのである。

Tom は子供の頃から，情に薄い残酷なところをもちつつも，いやそれだからこそ，決して叱られるような間違いを起こすことのない，正義感のとても強い子供であった。その性格は今もなお決して変わることなく引き継がれてきていたが，そうした20歳に達した現在の Tom の正義を構成するものは，Philip 個人に対する彼の視方の中に凝縮されているように，先入観とか外見でしか人を判断しない性癖，親とか家系に対する絶対的な義務や忠誠心であった。そしてその Tom の正義感はすなわち St. Ogg の，特に Dodson の正義でもあったのである。したがって Maggie と Philip との恋に憤慨し，Maggie をいさめるために真っ先に Tom の口にのぼった上記の言葉は，Tom の持つ強い St. Ogg 的な正義に照らし合わされてより明確化した彼らの恋の不当性を Maggie の前に露呈することとなった。

Maggie とても Philip の愛を受け入れるというその行為が父 Tulliver や Tom に対する大きな反逆であることを心得ていなかった訳ではない。しかしそれを反逆的行為とする真の意義が父 Tulliver の Wakem に対する怨みと憎悪，復讐心にあるかぎり，Maggie は彼らの意向に従わねばならないという義務感より，deformity がゆえに世間一般から迎え入れらず，観念的にも世俗一切から隔絶された Philip への愛に，より大きな sympathy と生きる真実を見い出していたのであった。そのような Maggie の passion に対して，Tom はそのように言うことによって，Tom からみれば当然優先されるべきである duty の意識をぶつけたのである。duty のかたまりとなり，それが Tom にどんな苦労ものりこえさせ，無一文になった家をまさに立派に建てなおし，そして家の名誉を回復することを成功させた源ともなっ

たことを目のあたりにして，とうとう Maggie は Phlilp への passion を断つことになるが，しかしそれは Tomへの duty というより Tom を通してはいるが，あくまで Tom の行動が父への duty から成っているのと同じレベルで，父 Tulliver への duty としてそれをしたのであった。そしてそれはあくまで Tom の手前のための，Tulliver の娘としての妥協であって，Maggie が心の内でしっかり納得した形での，passion と duty の問題に対する解決策ではなかった。そのため，Tom が家を破産に追いこんだその多額の debt を返済し，破産者としての不名誉をぬぐい去るやいなや，勢いあまった Tulliver が永年の宿敵である Wakem をむちで打ちのめし，大きなけがをさせて revenge を果たした直後，自分自身も激昂死して，現実的に父への義務がなくなると，Maggie はその2年後 Tom の許しを何とかとりつけて Lucy の家で Philip との交際を再開したのである。しかし実際に Philip と会ったのは，Maggie の心に彼女の次の恋の相手である Lucy の婚約者と目された Stephen Guest が入りこみ，さらに Lucy を通じて初めて知った上流社会の心地よさを Maggie 自身実感することになったあとのことであり，それにともなって Maggie にとっての Philip の存在意義は大きく変わっていく。

7

Stphen との最初の出会いは，Philip との悲しい別れとそれからまもなく起った父親の非業の死から2年後，Tom の強い反対をおしきって自活の道を選んで St. Ogg を離れていた Maggie が，それまでしていた仕事をやめて新しい仕事につくまでの1～2ケ月の間，Lucy の家に母親もろとも滞在していた間のことであった。Maggie の黒い目は子供の頃から父親や Philip の賞讃の的となっていたが，それは年と共にますます魅力的になり，Lucy をさておいて Stephen の気持ちを Maggie の方に強く引きつけたのも，Maggie の the sight of this tall dark-eyed nymph（背が高く黒い目をしたニンフのような姿）であった。一方 Maggie の Stephen に初めて会った時の感慨は次のようなものである。[59]

…Maggie felt herself, for the first time in har life, receiving the tribute of a very deep blush and very deep bow from a parson towards whom she herself was conscious of timidity. This new experience was very agreeable to her—so agreeable, that it almost effaced her previous emotion about Philip

（…Maggie は彼女の生涯で初めて自分の方がすっかり気おくれしてしまっているのに，その相手の人の方からパッと顔を赤らめて深々とおじぎをされるという，心からの敬愛の気持ちを受けている我が身を感じた。この新しい経験は彼女にはとても気持ちのよいものであった—その心地よさに以前の彼女の Philip に対する強い感情はほとんど消えてしまった。）[60]

Maggie は人を見る時にその人と自分との間にある negative な部分を極力見ようとはしない傾向にあった。それが Philip への恋となり，自分の心の中の父への義務感の欠如を暴露し，Tom から Maggie の大きな error と酷評される結果を招いたのである。しかしその傾

向は彼女の幼少の頃から培われた，ある意味では美徳ともいえる性格であり，決して変革されるものではなかった。上の引用文の中にも見られるように Stephen に対しても Maggie はそもそもその最初から Stephen が，外見的にも内面的にも一点非のうちどころがない愛すべきいとこ Lucy の婚約者ともなる人であるという絶対的条件をも忘れ，彼の物腰に自分への敬愛の情を認めたことに対してすっかり有頂天になってしまっている。

Stephen は指には diamond ring をつけ，attar of roses（バラ油）の香りをぷんぷんさせ，昼間の12時といえども nonchalant leisure（のんきな安逸の時間）[59] を楽しんでいるような，St. Ogg の町で最大の oil-mill（搾油工場）主であると共に最も手広い波止場営業でもある家の御曹子で，見るからに handsome な25歳の青年であった。Philip の，年齢こそ同じぐらいとはいえ，poor crooked body，それからそのために人と協調したり妥協したりできない偏屈な性格や陰気くささ，そしてさらに St. Ogg の町における異端的立場，等々とは，Stephen はその一切が逆であって，さんさんと陽がふりそそぐ上流社会に暮らす今をときめく若者である。Maggie が Philip にひかれたのは，5の部分でみてきたとおり，Philip の持つ知性と，また求めればどこまでも答えてくれそうな愛の泉を Philip の中に見い出したこと，そしてその crooked body への憐愍，それからもう一つ父親同士の間の悪感情を少しでも好転させようという Maggie なりの非現実的正義感であり，Phlilp の執拗な追及にもとうとう明言を避けたように，決して Philip を自分の lover として考えた上でのものではなかった。

Philip と初めて会った頃の Maggie は，色白できちんと美しく髪を結び人形のようにかわいくおとなしい Lucy などと比べたら，肌の色は黒く，ごわごわしたどうにも収拾のつかない髪の毛や，わがままな上にそそっかしくて失敗ばかりし，叱られることが多く，周りの人々の誰もが，自分自身でさえも，彼女が彼女の属する社会集団の異端的存在であることをはっきりと認識せざるをえないような少女であった。その認識が Maggie に Philip の持つ世界に対して sympathy を感じさせたまさにその原因であり，したがって Maggie の Philip への愛は彼女の sacrifice があればこそ richer であり，more satisfying であるという，自分の過去，現在の精神的な不幸のよりどころとして求められたものであった。

しかし今や Maggie は色の黒さこそあれ，それもそれほど気にならず，かえってそれは黒い目の魅力をより引き立たせ，この tall, dark-eyed nymph with her jet-black coronet of hair（背が高く，漆黒の髪を小冠状に結びあげた，黒い目のニンフ）に，誰もが個性的な美しさを見い出す女性へと変身を遂げたのである。ましてや父親亡き後の，2年ものつましくみじめな自活の経験は，いやがおうにも Maggie をまた self-renunciation に引きもどし，Maggie の心から社会の異端的意識をすっかり消し去って，もはやかつて Philip の愛の中に見い出したもののことごとくが，Philip が poor crooked body であることを除いては，すべてMaggie の中で霧散してしまっていたのである。そして Maggie は今，pity とか sacrifce とかの意識から全く解放された立派な紳士である Stephen から敬愛の情を受けて，生まれて初めて自分にとっての異性を Stephen の中に見い出し，その中にある快感を感受したばかりでは

なく，Stephen の背後に，the half-remote presence of a world of love and beauty and delight, made up of vague, mingled images from all the poetry and romance she had ever read, or had ever woven in her dreamy reveries（それまでに彼女が本で読み，あるいは自分の夢想の中に織りこんできた，ぼんやりと入りまじっているもろもろの映像で作り上げられた愛や美や喜びの遠いようで近くにありそうな世界の存在）を感じたのであった。(61) それは特に家が破産してからの陰気でみじめで寂しかった生活の中で Maggie が常に憧れていたものであり，Philip との関係の中で見られた，読書や音楽や，また世の中のあらゆることを知りたいという哲学的思索に対する欲望に基づいた知的 egoism を規定した彼女の hungry nature の鋒先が， all the advantages of fortune, training and refined society（富や教養や上流社会の中にあるあらゆる利点）に向けられたことを表わすものであった。(62) その good society は，Tulliver 家などはもってのほかで，名門を誇る Dodson の家系の Mrs. Tulliver の二人の姉の家である Glegg 家や Pullet 家などでさえも入りこむ余地のないほどの good society なのであったが，事業の成功によって上流社会に仲間入りしていた Deane 家の令嬢として，社交界ではすでに押しも押されもせぬ立場にあった Lucy を通じて Maggie は一挙にSt. Ogg の町のその higher society にのり出したのであった。そしてたちまちにして Maggie の飾らないでも引きたつ個性的美しさはその good society の ladies の間だけではなく，billiard-room に集う殿方たちの論議の的にもなっていくのである。その思いもかけなかった展開に Maggie は次のような感動を受ける。

> Thus Maggie was introduced for the first time to the young lady's life, and knew what it was to get up in the morning without any imperative reason for doing one thing more than anoter. This new sense of leisure and unchecked enjoyment amidst the soft-breathing airs and garden-scents of advancing spring—amidst the new abundance of music, and lingering strolls in the sunshine, and delicious dreaminess of gliding on the river—could hardly be without some intoxicating effect on her, after her years of privation ; and even in the first week Maggie began to be less haunted by her sad memories and anticipations. Life was certainly very pleasant just now : it was becoming very pleasant to dress in the evening, and to feel that she was one of the beautiful things of this spring-time. And there were admiring eyes always awaiting her now ; she was no longer an unheeded person, liable to chid, from whom attention was continually claimed, and on whom no one felt bound to confer any. It was pleasant, too, when Stephen and Lucy were gone out riding, to sit down at the piano alone, and find that the old fitness between her fingers and the keys remained, and revived, like a sympathetic kinship not to be worn out by separation—…Not that her enjoyment of music was of the kind taht indicates a great specific talent ; it was rather that her sensibility to the supreme excitemnt of music was only one form of that passionate sensibility which belonged to her whole

nature, and made her faults and virtues all merge in each other—(63)

（このように Maggie は初めて若い貴婦人の生活に仲間入りし，そして取りあえずまずこれをしなければならないからというさしせまった理由もなく朝起き出すということがどういうものであるかを知った。春のさかりの微風と花園の芳香の中で—初めて経験する豊富な音楽や日ざしの中のそぞろ歩きや川を舟で行く時の夢みるような心地よさの中で—余暇を楽しみそして阻止されることのない存分の楽しみを味わうという新しい感覚は窮乏の何年かを過してきた彼女をうっとりさせずにはおかなかった。そして Maggie はすでに第一週目で過去の悲しい思い出や未来への不安にあまりつきまとわれなくなり始めていた。生活は今まさに確かにとても楽しかったのである。夕方正装しそして自分がこの春の美しいものの一つであることを感じることはとても楽しみになってきていた。今では常に彼女を待ち受けている賞讃の目があった。彼女はもはやともすれば叱られたり常に気配りが要求されながら誰からも何も気を使ってもらうことのなかった，いわば無視された人間ではなかった。また Stephen と Lucy が乗馬に出かけた時，ピアノのところに一人すわって，指と鍵盤のぴったりと適合したその感覚をよびさましそしてその感覚が別離によっても消滅することのない，気の合った親戚関係のように再びよみがえるのを見い出すことも楽しかった。彼女が音楽を楽しむのは彼女が音楽に特別の才能があるからという訳ではない。むしろ音楽の持つ至高の喜悦への彼女の感受性は彼女の性格の全体に付随する激しい感受性の一つの形にすぎず，またそれは彼女の欠点も美点もすべて一つに融合させるものであったのである。）

6でみたような Maggie の，貧困のどん底におちいってもなお苦しくなるほどにまで心に抱き続けたあらゆる美しいもの喜ばしいものへ熱烈な憧れと，身の周りからすっかり消えてしまった夢幻的な音楽を追い求める気持ちは，かつては Philip の差し出してくれる本とか彼のきかせてくれる歌とかにわずかな活路を見い出したのであったが，今や思いがけない運命の展開でとうとうたる大河となってたちまちに Maggie の中からあふれ出したのである。それと共に Philip は Maggie にとって，もはや暗く悲しかった遠い過去の思い出の形見になりかけていた。それで Philip との再会の日が延期されたのにも Maggie はさほど残念に思わなかったのであった。その間に Stephen から投げかけられる無言の愛の印は Maggie の心によりはっきりした印象となって映り出していた。Stephen の，Maggie の deep strange eyes に憧れ，そしてその視線を求める気持ちはほとんど monomania（偏執狂）になりかけていたのである。Maggie もまた，それまでの自分の愛の世界を構成していた，兄の Tom や，Lucy でさえ「いとこの Tom が二人の間の身体的不調和にぞっとしたのも一理あるという抗しがたい印象を持った」deformity の Philip とは全く異なり，長身の自分にもふさわしいほど背が高く，がっしりとしたハンサムな gentleman である Stephen の，自分に対するそのような気持ちを待ち望むようになっていく。(64) Maggie は Stephen が Lucy のほぼ間違いない婚約者であることを意識するせたびに激しい自責の念にかられはするが，次第に表面化してきた Stephen からの求愛に心はどんどん肯定的な方向へと動かされていく。

その間に Lucy と Stephen の音楽上の仲間に加わっていた Philip との再会，そして過去

の友情の回復が進行していた。Tom によって Maggie との絶交が余儀なくされて以来二年間がたち，その直後に起った Tulliver の，自分の父親である Wakem へのむちでの打擲事件にもかかわらず，Philip の方は当座は Maggie を互いに愛を告白した当時のその延長線上で考えていたが，彼の鋭い感受性は次第に Maggie のまなざしやふるまいにある変化の形跡を読みとっていく。そしてまもなくその変化の原因が Stephen からの愛にあることを知り愕然とするが，Maggie と，Lucy, Stephen との関係から Maggie の Stephen との愛に幸福など望めようもないことと，Maggie と Philip のそれまでの愛の過程を知った Lucy の励ましを得て，とうとう Philip は Maggie との結婚の許可を父親から取りつけるに到る。父親Wakem の心の中に不動のものとなっていた Tulliver 家への敵意は Maggie を介してのみ融解し，Wakem がかたくなに返還を拒否していた Dorlcote 水車場はすんなりと Tom のもとへと返されたのである。

しかし，Philip への Maggie の passion は Stephen からの temptation が次第にあからさまになるにつれ，Maggie の中でその熱を失い，今や Stephen からの危険な愛から身を守りそれを拒否する力を求めて走り寄る a sort of outward concience（外なる良心というべきもの）へと変化していったのである。Stephen の求愛を斥け，自分の感情の中にわき上がるどうしようもない彼への思慕を断ち切るためにも，Maggie は過去から継続されている Philip との愛の中に心の平安を見い出そうとした。大きな罪と immorality を含んでいる Stephen との激しい愛に比べれば，Tom の思惑だけしか気にかける必要のない Philip との，sacrifice とお互いの sympathy，それから過去の友情とで成り立っている静かな愛は，現在の Maggie にとってはまさに sacred place（聖所）であった。したがって，もちろん Philip の父 Wakemへの説得もあったが，自分の善意と尽力が大きな効を奏して Dorlcote 水車場が Tom へ無事返還された時，Philip との結婚を勧める Lucy に対して Maggie が言った "Yes Lucy, I would choose to marry him, I think it would be the best and highest lot for me—to make his life happy. He loved me first. No one else could be quite what he is to me. But I can't divide myself from my brother for life. I must go away, and wait. Pray, don't speak to me again about it"(65)（「ええ Lucy，できたら彼と結婚したいわ。私はそれが私の最善の，かつ最も高貴な運命だと思うわ，彼の生活を幸せにすることがよ。彼は私を最初に愛してくれたのだわ。私にとっては誰も現在の彼のようにはなれないのだわ。でも私は生涯兄と仲たがいして暮らすわけにはいかないの。私は去らなければならない。そして待たなければ。お願いだからそのことを二度と私に言わないでね。」）という言葉は，Philip の愛の中でのみ冷静に考えられる，Stephen への愛をも含めた自分の現在の状況に一つの結論を与える分別ある言葉といえよう。

すなわち Philip の側の passion と duty は父 Waken の同意を得てやっと融和をみたにもかかわらず，Maggie の Philip への passion は Red Deeps での彼らの別離の時を最高に次第に観念的になり，今や Stephen という別の対象への passion に対する negative な効果を持つ duty を構成する一要素に変ってしまったのである。しかしその Maggie の Phi-

lip に対する義務の意識は，上に引用した Maggie の言葉からもわかるとおり，Tom に対するもの Lucy に対するものに勝るとも劣らない強い力となり Maggie の Stephen への passion 抑止に大きな影響を及ぼしたのである。

このように別離から 2 年後に再会した Philip は，過去の友情につながり，「最初に」自分を愛してくれた人という義務に基づいた静かな憩いの源泉ではあったが，一方でもはや Maggie にとって passion と duty の板ばさみになって悩む存在ではなく，期せずして，Stephenへの Maggie の慕情を，周囲の人々（特に Lucy）の目からくらます存在となったのであった。

8

Maggie の義務感はこのように過去現在未来のつながりの中で決められていた。Maggie は Philip の "Then the future will never join on to the past again, Maggie? That book is quite closed?"（「それでは未来は決して過去と二度と結び合わされないのですか，Maggie？その本はもうすっかり閉じられてしまったのですか」）という問いかけに対して "The book never will be closed, Philip," …; "I desire no future that will break the ties of the past. But the tie to my brother is one of the strongest. I can do nothing willing that will devide me always from him"[(66)]（「その本は決して閉じられることはないわ，Philip」…「私は過去のきずなを断ち切るようなどんな未来も求めていません。でも中でも私の兄へのきずなが一番強いものですわ。私は兄と仲たがいするようなことはどんなことも好んでしようとは思いません。」）と答えている。そのように Maggie の義務感は過去のつながりによって規定されるものであり，父の存命中には父親に対して，父の死後は，自分の一番古い記憶が Tom と手をつないで Floss 川のていぼうに立ち川の流れを見つめていたことであったということのために Tom に対して，最も強い義務の力を持ったのである。そして愛，結婚については Stephen からの誘惑がどんなに強く，そしてそれに自分の心がどんなに動揺させられようとも，自分を「一番最初に」愛してくれた Philip に義務があるという強い信条を持っていた。

父 Tulliver の妹である Aunt Moss のところに Maggie が滞在中，St. Ogg から遠路はるばるそこにまで押しかけてきて，激しい愛の言葉を投げかけ，お互いに Philip, Lucy と別れて自由の身として自分との結婚を説き伏せようとする Stephen に対して Maggie は次のように言っている。

> "You feel, as I do, that real tie lies in the feelings and expectations we have raised in other minds. Else all pledges might be broken, when there was no outward penalty. There would be no such thing as faithfulness"[(67)]
>
> （本当のきずなは私たちが他の人の心に引き起してきた感情とか期待の中にあるということを私と同じようにあなたもお感じなっているんだわ。そうでなければ，どんなに固く結ばれた約束もみんなすぐ破られてしまうでしょう。外面的なはっきりとした罪がなくなるのですから。誠実さなどのようなものもなくなってしまうことにもなるのです。）

その Maggie の言葉への Stephen の反論，説得に対して Maggie はさらに続ける。

"Oh, it is very difficult—life is very difficult! It seems right to me sometimes that we should follow our strongest feeling ; but then, such feelings continually come across the ties that all our former life has made for us—the ties that have made others dependent on us—and would cut them into two. If life were quite easy and simple, as it might have been in Paradice, and we could always see that one being first toward whom…I mean, if life did not make duties for us before love comes —love would be a sign that two people ought to belong to each other. But I see—I feel it is not so now : There are things we must renounce in life : some of us must resign love. Many things are difficult and dark to me ; but I see one thing quite clearly—that I must not, cannot seek my own happiness by sacrificing others. Love is natural ; but surely pity and faithfulness and memory are natural too. And they would live in me still, and punish me if I did not obey them. I should be haunted by the suffuring I had caused. Our love would be poisened. Don't urge me ; help me—help me, because I love you."(68)

(「ああむずかしいこと—人生ってほんとうにむずかしいものですわ。時々，私も，心の中の一番強い感情に従うのが正しいことのようにも思われることもあります。でも，もしそうしたら，そのような感情は過去の生活のすべてが私たちのために築いてきてくれた絆—お互いに頼り合えたその絆と絶えず衝突してしまうのですわ—そしてそれらを二分してしまうのです。もし人生が天の楽園（Paradice）にあった時のように容易で単純なものであり，最初に会った人がいつでも…つまり，もし愛に出会う前に私たちの人生に義務がなかったとしたら愛は二人が互いのものになるべき印ともなるでしょう。でも私はわかるのです—私は今はそうではないという気がします。人生の中にはあきらめなければならないことがたくさんあります。愛とても断念しなければならない人もいます。私にはむずかしくよくわからないことばかりですわ。でも私にはとてもよくわかることが一つあります—それは他の人を犠牲にして自分の幸せを追求してはいけないし，またそうすることはできないということです。愛は自然です。でも憐愍や誠実さや思い出なども自然です。そしてもし私がそれらに従わなかったらそれでもなお私の心に生き続け私を罰することでしょう。私は私が引き起した苦しみにつきまとわれることでしょう。私たちの愛はむしばまれることになるのです。無理強いしないで下さいな。助けて下さいませ，助けて下さいな。だって，私は，あなたを愛しているのですもの。」

すなわち Maggie の duty は，自分と外界との間の過去から現在未来へと続く natural feeling なのであり，その相互関係の中で培われてきた絆を守ろうとする意識であった。そしてその絆は自分の過去を形成する，人物ばかりか，外界の一切と自分との間にある faith, trust, sympathy, love によって強力に結びつけられたものであった。その反面 Maggie は，子供の頃 Tom がひどいけがをしたとしても大声で泣くなんて卑怯だと言ったのに対し

て，"It was quite permissible to cry out" と言っていることからもわかるように，現在の自己の感情に忠実であることにも生きる真実[(69)]を認めていた。ところがすでに見てきたとおり，Maggie のこれまでの人生において自分の感情に忠実であろうとするその気持は，ある時は叱責や嘲笑の対象となり，ある時は egoism として阻止され，一度として満たされることはなかった。Maggie のそれまでの人生は，常に自己の内面と外界との軋轢に苦しんだ人生といえよう。Tom をはじめとする Dodson 家的，あるいは St. Ogg 的考え方からすれば克己と自制により己の欲望よりも外的条件が優先されるべきことは自明の原理であった。しかし Maggie はあくまで self-renunciation という，強引に自己を放棄するという形でそれを行おうとしたのである。一時的には，それは Maggie を耐えられないような苦しみから完全に救出したかにみえたが，そのような解決策に真の心の安寧などありえようはずはない。Stephen との愛についてもまず Lucy を，Philip を，そして Tom のことを思えば，上に引用した心の吐露は彼女の理性から出た実に良心的かつ妥当性を持ったものではあった。しかしそれまで常に不当に抑圧されてきたという潜在的意識は彼女の心に次のような恐ろしい邪念をも引き起す結果となった。

> ; why should not Lucy—why should not Philip suffer? She had had to suffer through many years of her life ; and who had renounced anything for her? And when something like that fulness of existence—love, wealth, ease, refinement, all that her nature craved—was brought within her reach, why was she to forego it, that another might have it—another, who perhaps needed it less?[(70)]
>
> (なぜ Lucy が—なぜ Philip が苦しんではいけないのだろう。彼女の生涯の長い年月を通して苦しまなければならなかったのは彼女だったのだ。そして誰が彼女のために何かをあきらめてくれたというのだろう。それに生活を充足させてくれるそのようなもの—愛，富，安寧，高雅等，彼女が心の底から追い求めていたあらゆるものが彼女の手の届くところまできているというのに，他の人が，多分自分ほどもそれを必要としない他の人がそれをとろうとしているというのに，なぜ彼女がそれを持ってはいけないのであろうか。)

かつての Philip への Maggie の passion は当時彼女が追いこまれた逆境と彼女の高い知的関心とからしていかにも自然であったのに比して，Stephen に対する彼女の passion にはその最初から違和感があったその原因がここで明確になる。Maggie は Stephen の人間的魅力に関しては，彼の持つ音楽的才能とわずかに知性の香りのする話術にしかそれを認めてはいなかった。それなのに彼にぐいぐい引かれていったのは，こういった wealth, ease, refinement 等の彼の背景にある世俗的条件にも魅せられたからであった。ほんの二年前，St. Ogg の町の上品な人々のみんなが目をそむけるほどのひどい deformity を負った Philip の，宿命的 self-renunciation への sympathy と，彼の持つ内面的な，絵画の天才的才能，音楽の才能，学問的ないろいろな優れた知性への共鳴，そして彼の自分への大きな愛に自らの窮状を救われて，いかにそこに sacrifice の意識があったとしても最終的には彼の愛を受け入れた Maggie の実質主義的生き方とは，それはあまりにもかけはなれているようにみえるのであ

る。過去，現在，未来の一貫性を重視するのであれば Maggie は例えどんな事情があろうとも，Stephen からどんな大きな temptation があろうとも Stephen と二人きりの秘密の愛の時を持ってはいけないのである。二人きりで Floss川に boat を浮かべてはいけなかったのだ。しかし彼女はそれをした。

Stephen は，その舟遊びは Lucy が企画したことであり，そして Philip が Lucy と Maggie の舟頭になる予定であったのに Lucy は父親と外出することになり，Philip は体の不調で Stephen に自分に代わって舟のこぎ手になるよう依頼してきたのであって，潮に運ばれてその日のうちに帰れないところまで来てしまった以上，結婚するのが常套であるという，彼ら二人の運命的な事の成り行きを力説する。しかし Stephen にも Maggie にも，Lucy や Philip の都合はともかく，二人だけで boat に乗るかどうかの選択のチャンスはあったのだし，そして予定していた目的地を素通りしてはるか遠方にまで舟が運ばれてしまったのは Stephenの意図によるものであった。

この性格と運命の問題について George Eliot は次のように言っている。

> But you have known Maggie a long while, and need to be told, not her characteristics, but her histoy, which is a thing hardly to be predicted even from the completest knowledge of characteristics. For the tradgedy of our lives is not created entirely from whithin. "Character," says Novaris, in one of his questionable aphorisms, "character is destiny." But not the whole of our destiny.(71)
>
> (しかしあなたがたは長い間 Maggie を知っているのであり，知らされねばならないのは(72)彼女の性格ではなく経歴なのである。そしてその経歴というものは性格を完全に知ったからといってもなかなか予言できるものではない。というのは我々の人生の悲劇は内面的なものだけで作られはしない。「性格とは」Novaris は，彼の疑わしい金言の一つの中で，「性格は運命である」と言ってはいる，でも運命のすべてではないのだ。)

すなわち Maggie の history はかくして Lucy，Philip の不都合という運命的条件と，Maggie 自身の性格とがあいまって，愛すべき，善の権化のようないとこ Lucy への最大の裏切であるその行為を犯すべく作られていったのである。普通の感覚の女性であれば，子供の頃から姉妹のように育ったいとこが，心の底から愛し結婚が待たれるその相手から例えどんなに大きな temptation があろうとも少しなりとも心を動かされることすらありえないことと思われるのに，いったい Maggie のどこにこの常識を破る悪魔の力が潜んでいたのであろうか。George Eliot は Maggie は error を犯しやすい性格であったと言っているが，それは単なる彼女の error として片づけることはできない，他の多くの人々を悲しみと苦悩におとし入れる非道な行為であった。Maggie 自身はそれを自分の性格的弱さであると言っているが，決してそれだけではない。してみると Maggie の彼への愛は彼女のみじめな過去への revenge だったのではないだろうか。Stephen とのその恋の逃避行がもたらした Lucy，Philip，Tom，それから母親の Mrs. Tulliver をはじめとする Dodson 家の家系の親戚の人々への裏切りは，Lucy に対しては，子供時代，Lucy 自身は危害を加えるなどということは決

してなかったものの，肌の色とか，お行儀とか髪の毛のこととかなどで引きくらべられては Maggie を劣勢に追いこんだばかりか，Tom の愛を奪う憎き存在でもあったそのことへの revenge となり，また満たされない愛と知性にやっきになっていた子供時代，それと心身共に一番みじめであった一家の破産時の痛恨の日々の象徴でもある Philip に対しては，彼が象徴するその苦い過去への revenge であり，そしてまた Tom に対しては，愛に飢えた Maggie の性格の根源を作ったことへの revenge であり，Dodson の親戚に対しては過去において自分を a most undesirable niece として排斥したことへの revenge を意味したものとも解されるのである。

しかしその行為もたちまち後悔の念にさいなまれるようになる。そして Maggie のその時の後悔を構成していた最も大きなものは，過去の生活の中で形成された trust と love とで成りたち，現在の自分を束縛すると共に未来を導く人生の手引の糸でもある duty の意識であった。もちろんその意識はその時になって初めて Maggie の心に生じたものではない。それは Stephen への passion に押しつぶされていたものが Stephen との逃避行の二日目，冷静に事の顛末を見ることができるようになった Maggie の心の中で再び勢いをもり返した意識であった。

"We have proved that it was impossible to keep our resolutions. We have proved that the feeling which draws us towards each other is too strong to overcome : that the natural law surmounts every other ; we can't help what it clashes with."(73)

(僕たちは以前した決心を守り通すことなど不可能だということを証明したのです。僕たちは互いに引き合う感情が余りに強いがために押さえられないものであることを証明したのです。必然的法則は他のすべてを克服するものであることを。僕たちはそれがどんなものとぶつかり合おうともどうしようもないのです。」)

と duty より passion の優位性を説く Stephen に対して Maggie は，

"It is not so, Stephen—I'm quite sure that is wrong. I have tried to think it again and again ; but I see, if we judged in that way, there would be a warrant for all treachery and cruelty—we should justify breaking the most sacred ties that can ever be formed on earth. If the past is not to bind us, where can duty lie? We should have no law but the inclination of the moment."(74)

(そうではないわ Stephen —私にはそれが間違いであることがとてもよくわかります。私は何度も何度もそれを考えようとしてきました。でも今わかったのです。もし，私たちがそんなふうに判断すれば，あらゆる裏切りや残酷な行為に正当な理由がつけられることになるのです—私たちは地上で結ばれる最も神聖な絆をこわしても何の科も受けないことになります。もし過去が私たちを束縛する力がなかったなら義務はどこにあるというのでしょう。その時々の気分以外には何の法則も持たないことになってしまいます。)

と言っている。

かつて Maggie の Philip への passion に対して negative な作用を及ぼした duty も，

過去において唯一人 Maggie を心の底から愛してくれた父 Tulliver への love と trust に基づくものであり，この意味では Stephen への passion を否定しようとするこの duty と本質的に共通してはいるが，Philip との恋の場合の duty には父 Tulliver への娘としての絶対的服従という規範にのっとって，Maggie を否応なくそれに従わせる強制力をもっていたのに対して，Stephen の Passion に対する duty は，純粋に Lucy への，Philip への，そしてまた Tom への，Maggie の良心の範ちゅうの問題であるだけに，Stephen への Maggie の passion とそれに対する duty はPhilip との恋の場合よりも基準をなくしたずっとむずかしい問題として Maggie の前に提示されたのである。

しかし，この Stephen の passion に対する duty は直接的には，Lucy，Philip，Tom への過去からの love と trust に基づいてはいたが，間接的にはそれはさらに拡大され Maggie の過去の生活を構成する一切のもの，ひいては彼女が生まれ育った St. Ogg の町全体への love と trust から成っているものであった。したがってその duty を捨て passion を選ぶことは，Maggie にとって自分の過去の一切を抹殺することを意味した。Maggie の心には Stephen との passion を貫くことの中に約束されている豊かな愛と喜びと生活の安逸さにもとづいた幸福等への思いよりも，過去から切り離された a lonely wanderer になることへの恐れの方がより強く感じられたのである。それで Maggie は duty の意識の命じるがままに Stephen への未練をふり切り Tom と母の住む Dorlcote 水車場の生家に帰ったのであった。しかし，Maggie に Stephen への passion を捨てさせるほど執着させたその生家にも，St. Oggの町にすらも passion にかられて誤ちを犯した彼女を温かく迎え入れてくれる場所はなく，Maggie は Tom の幼な友だちの Bod の家の一室にひっそりと身を寄せることになった。

うわさ好きの St. Ogg の町での Maggie の立場は時がたつにつれよくなるどころかどんどん悪化し，Maggie が最も恐れていた「過去と切り離された a lonely wanderer」は，そうならないように duty を選んだにもかかわらず，St. Ogg からの追放という形で必至のことと思われた。結局 Maggie は Stephen との passion を貫いたとしても，それを諦めて duty をとったとしても，共に世間から排除される運命にあったのであるが，彼女が選んだduty に忠実に生きるその人生の方が，形態的にはより苛酷なものとなって Maggie の上におおいかぶさってきたのである。しかし Maggie はその生活がどんなにつらく苦しいものであっても堪えしのぶことが Lucy や Philip や Tom への償いであり，そして彼らへの全きduty の成就であると考える。必然的な self-renunciation の境地である。Maggie は自分の人生に再度訪れたその self-renunciation こそ Philip の世界を構成している本来的なものであって，それがいかに苛酷なものであるかを初めて知ったのである。

若く健康な体が予測する Maggie の人生の長さと共にあるその苛酷な試練は，Maggie をしばしば絶望のふちに追いやった折も折，Stephen から以前にもまして強く Maggie を愛し彼女を必要としている現状を知らせた手紙が届く。Maggie の心は大きく動揺するが彼女はやはりその動揺を a pang of conscious degradation（意識的墮落の中の罪の苛責）として斥

ける。それは Stephen との永遠の別れであり，Maggie の心の中における passion の duty への完全な従属であった。Maggie はそれを決意とか決断とかでした訳ではない。二ケ月前 Stephen の許を去らせた an inspiration strong enough to conguer agony—to conquer love が再びもどってきたのであり，長い過去の中から作られた the foundations of self-renouncing pity and affection, of faithfulness and resolve[75] が彼女の中で湧き出したからであった。Dr. Kenn は牧師としての立場から Maggie の the adherence to obligation, which has its roots in the past（過去に根ざした義務への執着）にもとづく彼女の良心とその心情を賞讃してはいるが，Stephen からの手紙を読んだ彼は Maggie が Stephen と結婚することが the least evil であると考える。そしてそれは St. Ogg の人々の一般的感情であったのである。要するに Maggie の，duty を passion より優位に置くその選択は，Maggie の良心を満足させただけのことであり，決して Maggie の対社会的立場を有利にするものではなく，Stephen をさらなる苦悩に陥れた不埒で非情な女性であるという風評を生み出す結果となったのである。[76]

George Eliot は作者として，Maggie と Stephen の置かれている立場からすれば，Maggie がとった行為はもっとも正しいものと考えていたことは明らかであるが，彼女自身実生活において兄 Isaac の強烈な反対をおし切って結婚した妻子ある G. H. Lewis との生活には，「世間の非難に対して，傲慢に対することなく彼と二人でいることの幸福に，謙虚であろうと自戒」していたのであり，passion の duty への従属という課題に対して，自らもできなかった人間の能力の限界を越えた理想論を Maggie に押しつけているように思われてならない。[77]

かつて父 Tulliver が，Philip の父 Wakem を自分の不運の元凶とみなし，病み疲れた余命を彼への復讐にかけていたその現実を目のあたりにしながら，旺盛な知的欲求も満たされない当時の悲惨な一家の境遇から自分だけ逃げ出すために Philip との人目を避けた友好を一年間も続け，あげくの果ては将来の結婚につながる永遠の愛を約束するに至るという，愛のためにはどこまでも徹底できる Maggie の egoism からは，Stephen への passion を，彼と共にいることに至上の幸福を感じつつ，もはやのがれられないところまで来ていながら，Lucy やPhilip や Tom への duty に従わせたその心の強さに，私はどうしても不自然さを感じるのである。その辺のことについて George Eliot は次のように言っている。

> The great problem of the shifting relation between passion and duty is clear to no man who is capable of apprihending it ; the question, whether the moment has come in which a man has fallen below the possibility of a renunciation that will carry any efficacy, and must accept the sway of a passion against which he had struggled as a trespass, is one for which we have no master key that will fit all cases. The casuists have become a byword of reproach ; but their perverted spirit of minute discrimination was a shadow of a truth to which eyes and hearts are too offen fatally sealed—the truth, that moral judgments must remain false and hollow, unless they are checked and enlightened by a perpetual reference to the special

circumstances that mark the individual lot.[78]

(情熱と義務との間の浮動の関係の持つ大きな問題はそれを理解しえたとしても誰にも明白なものとはなりえないのだ。何か効を奏しそうな拒絶もできないようなところまで落ちこみそれまで迷惑なものとして戦ってきた情熱の支配を受け入れなければならない時が来てしまったかどうかという問題は，あらゆる場合に当てはまるマスター・キーを持たない問題なのである。詭弁家は非難の種になってきた。しかし詳細に識別する彼らのねじれた精神にも，私たちの目や耳があまりにもしばしば完全に閉じふさがれていて気付かない真実の影があったのだ。—道徳的な判断は個人の運命に付随した特別の状況をたえず考慮に入れて抑圧され啓発されなければいぜんとして偽りのあるうわべだけのものとしてそのまま残されるに違いないという真実である。)

Maggie の special circumstances は Stephen に対する彼女の passion に対してそれほどの抑制力を持つべきものであったのであろうか。Stephen と Lucy は婚約が目されてはいてもまだ恋人同士のままだったのであり，その意味においては Stephen にとっては Maggie も Lucy と同じ立場にあったのだし，それより何より Stephen は Maggie に Lucy には得られない真実の愛を感じていたのである。また Maggie と Philip の約束にしても二年前の，Tulliver の Wakem の打擲事件とそれによる激昂死，その一連の事件による両家の決定的不和以前のことであって，状況の変化は Stephen が言うように新たな duty を生み出してしかるべきだったのではないだろうか。George Eliot が Lewis とのことで大いに励まされ強い信念を得た Feuerbach も「愛は義務を付随させる。それゆえ義務を綱領や教義によって強制する必要はない」としているのである。[79]

しかし我々はこの *The Mill on the Floss* が執筆年月日（1860年）よりも30年余りも時代をさかのぼった時にその舞台背景があったということを思い出さねばならない。当時の St. Ogg というかびくさいほどの古い因襲にしばられた町における Maggie の置かれた立場からは，*Adam Bede* の中で Hetty が Arthur との子供ができた事実をあくまで村人の目から隠蔽せざるをえなかったように，道徳上の判断においては彼女の属する共同体の code の束縛からのがれることはできなかったのである。Maggie の，duty につき従った人生は George Eliot が彼女の小説の中で強調しようとした「進歩への確信」と「過去の伝統の最高のものを慈しむ」気持ちの具現されたものと見るべきであろう。

Maggie が duty を選んだことについて，それが正しかったかどうかは先に引用した passion と duty についての作者の言葉からも察せられるとおり容易に結論づけることはできないとてもむずかしい問題であるが，人間性という観点からみた場合，作者自身 Maggie のその選択は決して正しいものとはしておらず，逆にそのような passion が許される社会を期待しているものと思われる。その意味では Maggie は時代の，また当時の St. Ogg という町における彼女の属する社会の犠牲者であったといえるであろう。そして自分の良心に従って dutyを選んだとはいえ，なおかつつきまとう罪悪感と社会からの疎外感による Maggie の苦しみは死より他には解消の道はなかった。死より他には Tom との和解の道はなかった。

当時の Maggie にとって duty は過去から培われた tie であり良心であると共に最も強制力のある道徳的規範であり，ひいては彼女自身の命でもあったのである。そしてさらにこれはそれまでの，小説全体に流れる陰うつさの唯一の救いであった Maggie の，egoism は強いけれどものびやかで進歩的な性格を，Dodson 的な陳腐なレベルのものにまで引きおろすものとなり，小説の読後感を今一つすっきりさせない大きな原因の一つとなっているのである。

注

本文中の *The Mill on the Floss* の引用は Everyman's Library (London, reprinted 1964) を定本とした。

(1) *The Mill on the Floss*, Book Fourth, Chap. I

(2) Her attachment to Charles Bray was the first of three love-affairs with larger-than-life characters, the sort of men who held a magnetic attraction for Mary Ann Evans. She was completely enamoured of Bray. (*George Eliot*, Woman of Contradictions, by Ina Taylor, 1989, London, Rosehill and the Inhabitants of that Paradise, 1842-1849)

(3) Charles Bray：まだ22歳ほどの George Eliot を自由思想家仲間のもとに招いたコベントリーの知的友人グループの一人であり，また裕福な a-silk-ribbon weaving factory の経営者.（『ジョージ・エリオット』雄松堂出版，R.アシュトン著　前田絢子訳，1988年，P 3）

(4) Ibid.

(5) Feuerbach：(1804-1872) ドイツの唯物論哲学者。ヘーゲル左派に属する。ヘーゲル哲学の神学的性格を批判し，個別的な自然物としての人間学を樹立した。また，神の幻想からの解放を解き，マルクス・エンゲルスに大きな影響を与えた。著「キリスト教の本質」など。

(6) Spinoza：(1632-1677) オランダのユダヤ系哲学者。心と物の両界は，唯一の実体である神の二属性・二様態であるとしてデカルトの二元論に対して一元論・並行論を説き，神即自然の汎神論を主張。また，世界はすべて神の因果的必然下にあるが，ただこれを「永遠の相の下に」洞察する知的直観にのみ真の自由と善・愛があるとした。

(7) Goethe：(1749-1832) ドイツの詩人・作家。「若きウェルテルの悩み」などで，シュトゥルム―ウント―ドラング（疾風怒濤）運動の旗手として活躍。10年間ワイマールで政務を担当。のちイタリア旅行の体験などを通じてシラーとともにドイツ古典主義を完成。また自然科学の領域でも業績をあげた。戯曲「ファウスト」「エグモント」，叙事詩「ヘルマンとドロテーア」，小説「ウィルヘルムーマイスター」，自伝「詩と真実」，自然科学論集「色彩論」など。

(8) 同上『ジョージ・エリオット』雄松堂出版，P20

(9) Auguste Comte：(1798-1857) フランスの思想家。社会学の創始者とされる。人間の知識に神学的・形而上学的・実証的の三段階を認め，自然科学的実証主義による社会学体系を確立した。晩年は人間教という宗教を創始。著「実証精神論」「実証哲学講義」など。

(10) Herbert Spencer：(1820-1903) イギリスの哲学者・社会学者。進化論に基づいて社会の進化発展を説明，宇宙・生物・道徳・社会にわたる総合的・有機的進歩の法則を主張した。主著「綜合哲学体系」

(11) Charles Robert Darwin：(1809-1882) イギリスの博物学者。測量船ビークル号で南半球を

周航して動植物・地質を調査し，また育種動植物の変異の観察などをもとに自然選択説を提唱，生物進化を説明。生物学ばかりでなく社会思想にも大きな影響を与えた。著「種の起源」「ビーグル号航海記」など。

(12) Thomas Henry Huxley：(1825-1895) イギリスの動物学者。海産物，特にクラゲの研究のほか高等動物の内・外胚葉の研究を行う。ダーウィンの友人で進化論を支持し，その普及につとめ，人間の動物起源を初めて明言して論争をひきおこした。著「自然界における人間の位置」

(13) Kary Marx：(1818-1883) ドイツの経済学者・哲学者・革命家。エンゲルスとともに科学的社会主義の創始者。ヘーゲルの観念的弁証法，フォイエルバッハの人間主義的唯物論を批判して弁証法的唯物論を形成。これを基礎にフランス社会主義思想の影響の下で古典派経済学を批判的に摂取，資本主義から社会主義へと至る歴史発展の法則を明らかにするマルクス主義を創唱。また終生革命家として国際共産主義運動に尽力した。主著「資本論」

(14) 同上『ジョージ・エリオット』雄松堂出版，PP 25-26

(15) Robert Mackay, Marian (George Eliot の本名) に求愛した一人。当時50歳になったばかり。a wealthy academic, but he paid no attention to his dress and regularly turned up with a flannel waistcoat worn on the outside of his coat. Needless to say, Mr Mackay could not compete with John Chapman's charms in Marian's eyes and his suit came to nothing. 彼は後に *George Eliot* の小説 *Middlemarch* の a tedious scholar である Reverend Edward Casaubon のモデルとなった人である。(同上 *George Eliot*, Weidenfeld Paparbacks PP 91-92)

(16) D'Albert-Durade：1849年 (Marian 30歳) 父 Robert Evans の死去の後 Paris に渡った Marian と家族ぐるみで親交を深めた一家の主人。She (Marian) was invited to join in their musical evenings. At other times, she was escorted by Monsieur Durade sightseeing round old part of the town or taken to philosophical and scientific lectures. Predictably, Mary Ann fell in love with her host, though he appeared the most unlikely recipient of her affections, being so deformed in the spine from a childhood accident that he stood only four feet tall. He was grey-haired and looked rather haggard in the face, Marian told Clara. But his personality was of the sweetest；'I have not heard a word or seen a gesture of his yet that was not perfectly in harmomy with an exquisite moral refinement—indeed one feels a better person always when he is present,' she added. …His oil painting is one of the prettiest and most sympathetic portraits of her ever painted. (同上 *George Eliot*, Weidenfeld Paparbacks, PP 79-80) 彼は George Eliot の当小説 *The Mill on the Floss* の中の Philip Wakem にその一部がモデルとされている。

(17) 同上『ジョージ・エリオット』雄松堂出版，P 61

(18) Thomas Hardy：(1840-1928) イギリスの小説家・詩人。人生は悲劇であるという強い宿命感を示しながら，作品の舞台となる故郷ウェセックス地方の美しい自然や風俗描写を残す。小説「テス」「日陰者ジュード」，ナポレオン戦争に取材した詩劇「覇王たち」など。

(19) ：She's twice as 'cute as Tom. *The Mill on the Floss* Book First, Boy and Girl, Chap. II

(20) Ibid.

(21) *The Mill on Floss*, Book Second, School-time, chap. II

(22) 同上 Book First, chap. III

(23) Ibid.

(24) Ibid. chap. V

(25) 同上 Book Third, TheDownfall, chap. V

(26) Ibid.

(27) 同上 Book Fourth, The Valley of Humiliation, chap. I

(28) Ibid.

(29) ローマの軍隊はジュリアス・シーザーのときに（紀元前55）初めてイギリスに侵入し，さらに百年後クローディアス帝のとき（紀元43）にふたたび侵入，五世紀のなかばに全軍イギリスを去った。

(30) デイン人（昔デンマーク地方にいた住民）のこと。彼らはトレント川（フロス川のモデル）から上陸してイギリスに侵入した。

(31) アルフレッド王（849-901）はデイン人の侵略からイギリスを救った名君。

(32) スウェインというデイン人で盛んにイギリスに侵入したが1014年にゲインズボロで暗殺された。僧院に対する彼の残虐な仕打ちを恨んで彼に殺されたエドマンド聖者の亡霊が復讐したと伝えられている。

(33) 1066年ノルマンディー公 William（the Conqueror）の率いるノルマン人（もとスカンジナビアに住み10世紀に Normandy らを征服してそこに定住した Northman）の軍が Hastings に上陸して英国を征服した。

(34) Charles 一世と国会との戦争（1642-49）

(35) 清教徒（英国で Elthabeth 朝時代にカトリック教の制度儀式を極度に避けようとして英国国教内に起こった一派の新教徒，Charles 一世時代には政治団体を結成した。）

(36) 新教徒に対して旧教徒，特にローマカトリック教徒，天主教徒（Roman Catholic）

(37) 風鳥科の鳥。巣の近くに小枝などであずまや風のものをつくり，その入口を骨片や，貝殻，羽毛などで飾る。

(38) 同上 Book First, Chap. XII

(39) 同上『ジョージ・エリオット』雄松堂，P27

(40) 「*Adam Bede* の Hayslope 村，*Silas Marner* の Raneloe 村，*Felix Hold* の Little Treby 村がそれぞれの小説に意味するもの」

(41) カトリック教徒はイギリスでは議員や官吏になることを許されなかったが，これを許可する案（旧教徒解放令）を通過させるのにウェリントンが尽力した。この案の通過したのは1829年。

(42) 同上 Book Second, Chap. IV

(43) Ibid. Chap. V

(44) Ibid.

(45) 美しい王女が魔女のために醜い獣の姿に変えられて難渋するのを，王子が救いだすといったたぐいのお伽噺。

(46) 同上 Book Third, The Downfall, Chap. I
(47) (古代ヘブライ人の) 家神像 (託宣を受けて吉凶をうらなうために家庭に祭っていたもの)
(48) 注(28)と同じ
(49) 同上 Book Third, Chap. II
(50) 同上 Book Third, Chap. III
(51) Ibid.
(52) 同上 Book Fifth, Chap. I
(53) Ibid.
(54) 同上 Chap. III
(55) 同上 Chap. V
(56) 同上 Chap. IV
(57) 同上 Book Third, Chap. IX
(58) 同上 Book Fifth, Chap. V
(59) 同上 Book Sixth, Chap. II
(60) Ibid.
(61) 同上 Chap. III
(62) Ibid.
(63) 同上 Chap. VI
(64) 同上 Chap. VIII
(65) 同上 Chap. IX
(66) 同上 Chap. X
(67) 同上 Chap. XI
(68) Ibid.
(69) 同上 Book Second, Chap. VI
(70) 同上 Book, Sixth, Chap. XIII
(71) ドイツの詩人フリードリッヒ・フォン・ハーデンベルク (1772-1801) の雅号。ドイツローマン派中もっとも真摯な作家に属し，小説『ハインリッヒ・フォン・オフテンゲンゲル』，詩『夜の讃歌』等によって知られている。
(72) 同上 Book Sixth, Chap. VI
(73) 同上 Chap. XIV
(74) Ibid.
(75) 同上 Book Seventh, Chap. V
(76) Ibid.
(77) 『ジョージ・エリオット文学の倫理性』(George Eliot and Her Morality) (株 大盛堂書房 冨士川和男著 昭和53年2月28日)
(78) 同上 Book Seventh, Chap. II
(79) 前出『ジョージ・エリオット』雄松堂出版，P16